名古屋市立大学60年の歩み

名古屋市立大学

# 名古屋市立大学 60 年の歩み

名古屋市立大学

# 名古屋市立大学60年の歩み

桜山キャンパス（川澄）

滝子キャンパス（山の畑）

田辺通キャンパス

北千種キャンパス

c o n t e n t s


1 学長挨拶
2 市長挨拶
3 年表
9 特集①　歴代学長
10 大学及び各組織の現状と展望
11 市民の健康と福祉の向上に貢献する大学
12 環境問題の解決に挑戦し、貢献する大学
13 医学研究科・医学部
17 薬学研究科・薬学部
21 経済学研究科・経済学部
25 人間文化研究科・人文社会学部
29 芸術工学研究科・芸術工学部
33 看護学部・看護学研究科
37 システム自然科学研究科
39 リエゾン・センター
41 総合情報センター
43 キャリア支援センター
45 国際交流推進センター
47 医学部附属病院（市立大学病院）
51 特集②　名誉教授一覧
52 同窓会・後援会・学友会～60周年によせて～
53 医学部同窓会　瑞友会
54 薬学部同窓会　薬友会
55 経済学部同窓会　瑞山会
56 経済研究科同窓会　剣陵会
57 人文社会学部同窓会
58 芸術工学部同窓会　萱光会
59 看護学部同窓会
60 システム自然科学研究科同窓会
61 名古屋女子専門学校・名古屋市立女子短期大学同窓会　ひさぎ会
62 名古屋市立保育短期大学同窓会　さわらび会
63 名古屋市立大学後援会
64 名古屋市立大学学友会
65 特集③　思い出の蓼名荘
66 資料編資料編（蝶ヶ岳写真）
67 組織一覧
68 国内６大学との大学間連携に関する協定の締結
69 海外の交流協定締結大学
71 あとがき
72 記念誌編纂委員会

## 開学 60 周年記念誌の刊行にあたって

**名古屋市立大学　学長　戸苅　創**

我が国の学制改革の下、全国の国公私立大学が新制の総合大学として統合集約される中、現在の本学薬学部の前身であります名古屋薬科大学と本学医学部の前身であります名古屋女子医科大学が統合して「名古屋市立大学」となりましたのが昭和 25 年ですので、本年が「名古屋市立大学」として開学 60 周年を迎えることとなります。

今一度本学の学部別にその歴史を振り返りますと、名古屋薬学校（後の名古屋薬科大学）は明治 17 年に始まりましたので本年で薬学部は 127 年目を迎えます。名古屋市立女子高等医学専門学校（後の名古屋女子医科大学）は昭和 18 年に開校していますが、その前身であります名古屋市民病院と附属看護婦養成所が設置されましたのが昭和 6 年ですので、それを起点としますと医学部と看護学部は今年 80 年目となります。また、名古屋市保母養成所（後の名古屋市立保育短期大学）と名古屋女子専門学校（後の名古屋市立女子短期大学）が昭和 21 年及び翌昭和 22 年に設立され、今年それぞれ 65 年目及び 64 年目を迎えますが、平成 8 年に両短期大学を改組し、人文社会学部及び芸術工学部が設置されて今年 15 年目となります。昭和 39 年設置の経済学部が今年 47 年目、そして平成 12 年設置のシステム自然科学研究科が 10 周年を迎えたところです。

かくして本学は、日本を代表する大都市名古屋の中心に位置する、学生 4,000 人、教職員 1,500 人規模の大都市型総合大学として、広く国内外にアクセスし Global な社会貢献を実践している大学に発展して参りましたが、一方で、市民の皆さんの参加による Local な社会貢献を実践している大学でもあります。Global と Local の両機能を併せ持つ本学が「Glocal」に発展した堅実にしてユニークな大学と評される所以です。

本学の総ての学生や教職員が、安心して活き活きと学び、働ける環境の下で、さらに世界・社会貢献していくことで本学の存在が名古屋市の矜持であり続けたいと存じます。今後とも皆様の深いご理解とご協力をお願い申しあげます。

## 「名古屋市立大学 60 年の歩み」刊行を祝して

**名古屋市長　河村たかし**

名古屋市立大学が開学 60 周年を迎え、この 10 年間の足跡と現状、さらに将来への展望を紹介する記念誌を発行されますこと、心からお祝い申し上げます。

昭和 25 年に当初は医学部、薬学部の 2 学部でスタートした名古屋市立大学も、現在では 6 学部・7 研究科を擁するまでになりました。平成 18 年の地方独立行政法人化により公立大学法人名古屋市立大学となった後も、市民によって支えられる公立大学として、全ての市民が「誇りに思う・愛着の持てる」大学像を目指し、その個性や特色を一層発揮し、地域や国際社会への貢献を積極的に進めております。

開学から現在までの 60 年間に、2 万 6 千名を超える卒業生を社会に送り出し、地域の健康と福祉の向上や経済、文化の発展に貢献していることは大変誇らしいことです。これもひとえに、教職員はじめ関係の皆様のご努力と市民の皆様のご支援のおかげであり、ここに深く敬意と感謝の意を表します。

名古屋市立大学が開学 60 周年を迎える今年は、同時に名古屋開府 400 年という節目の年にあたります。本市ではこの記念の年を、名古屋の「誇り」や「自慢」を発掘・再確認し、これからの 100 年に向けて「誇れる名古屋」を提示する年にしたいと考えています。名古屋には、熱田神宮や名古屋城など多くの歴史的資産があります。また、「名古屋ことば」や「名古屋めし」など独自の文化も根付いており、非常に魅力ある大都市です。名古屋開府 400 年を機に、皆様にも、こうした名古屋の魅力を再確認していただき、誇りと愛着を持っていただくことで、「歴史に残る街ナゴヤ」を実現したいと考えております。

少子高齢化時代を迎え、大学を取り巻く環境は一層厳しさを増していますが、名古屋市立大学が「市民の健康と福祉の向上に貢献する大学」、「環境問題の解決に挑戦し貢献する大学」として、教育・研究の一層の推進と活性化を図り、その成果を地域に積極的に還元しつつ、ますますの発展を遂げていくことを期待しております。また、皆様方におかれましては、名古屋市立大学の発展のため、今後ともより一層のご支援、ご協力をいただきますよう心よりお願いいたします。

# 年 表

1949 昭和24年 10月 28日・名古屋市議会において名古屋女子医科大学と名古屋薬科大学を統合して、名古屋市立大学を設置する旨議決

1950 25年 4月 1日・名古屋市立大学設置（旧制医学部入学定員４０名、新制薬学部入学定員８０名）

1951 26年 6月 15日・薬学部位置変更
（鳴海町から市内瑞穂区田辺通３－１、及び同区萩山１－１１へ）

1952 27年 4月 1日・新制医学部医学科設置
（入学定員４０名）

昭和 28 年 医学部校舎

1955 30年 4月 1日・医学部進学課程設置に伴い、同課程及び薬学部一般教育系列の教育を行う教養部を設置

1957 32年 7月 31日・川澄地区（当時は名名古屋大学経済学部）の土地建物取得について、名古屋市と名古屋大学との間で土地建物交換覚書を取り交わす
9月 1日・附属高等厚生女学校を名古屋市立大学看護学校と改称

1958 33年 4月 1日・薬学部に薬学専攻科設置（入学定員９名）

1959 34年 5月 25日・大学本部を川澄キャンパスへ移転
5月 28日・旧制医学研究科に学位論文審査権附与

昭和 35 年 薬学部校舎

昭和 35 年 附属病院



1961 36年 3月 31日・旧制医学部及び同研究科廃止、薬学部専攻科廃止
4月 1日・大学院医学研究科（博士課程）・薬学研究科（修士課程）設置
12月 21日・附属病院の病床数を５１２床とする

昭和 36 年 基礎医学館完成

1963 38年 4月 1日・医学部医学科入学定員を６０名（従前４０名）に増員

昭和 38 年頃 山の畑キャンパス

山の畑キャンパス テニスコート

徽章（左・昭和 25 年、右・昭和 32 年作製）

1964 39年　4月　1日・経済学部経済学科設置（入学定員１５０名）

1965 40年　4月　7日・教養部の一部及び学生部を、山の畑キャンパスへ移転（田辺通キャンパスから）

1966 41年　3月 31日・薬学部を田辺通キャンパスへ統合
4月　1日・大学院薬学研究科博士課程設置
11月　7日・附属病院を改築、新病院（川澄キャンパス）にて診療開始、病床数を６２４床とする

昭和 41 年　川澄キャンパス

1967 42年　4月　1日・計算センター発足

1968 43年　4月　1日・教養部を山の畑キャンパスへ統合
・大学院経済学研究科修士課程設置
・薬学部薬学科入学定員を１００名（従前８０名）に、経済学部経済学科を２００名（従前１５０名）に増員
・看護学校入学定員を３０名（従前２０名）に増員

1970 45年　4月　1日・大学院経済学研究科博士課程設置、薬学部製薬学科増設（入学定員／薬学科６０名、製薬学科４０名）
・看護学校入学定員を４０名（従前３０名）に増員

昭和 45 年　旧経済学部校舎

1971 46年　4月　1日・看護学校第２科（夜間）設置（入学定員３０名）

1972 47年　10月 27日・本部棟完成（川澄キャンパス）

1974 49年　1月　7日・学生会館完成（山の畑キャンパス）

1975 50年　4月　1日・医学部医学科入学定員を８０名（従前６０名）に増員

昭和 45 年　川澄キャンパス

1981 56年　5月 31日・附属病院増築工事完成により、病床数を９１４床とする

1982 57年　3月 31日・野外教育施設「蓼名荘」完成（長野県茅野市）

1983 58年　1月　7日・附属病院の病床数を８２１床とする
5月 16日・附属病院の病床数を８０８床とする

薬友会館（昭和 59 年完成）

1985 60年　4月　1日・薬学部薬学科入学定員を５０名（従前６０名）に減員し、薬学部製薬学科入学定員を５０名（従前４０名）に増員

1987 62年　4月　1日・医学部分子医学研究所発足

1988 63年　4月　1日・名古屋市立大学看護短期大学部設置（看護学科入学定員１００名）

1989 平成元年　3月 31日・看護学校第２科廃止
4月　1日・大学院経済学研究科修士課程設置（社会人大学院、日本経済・経営専攻入学定員１５名）

1990 2年　3月 31日・看護学校廃止
4月　1日・大学院薬学研究科前期課程の入学定員を４５名（従前２６名）に増員

1991 3年　3月 31日・学生会館増築工事完成
4月　1日・経済学部経営学科増設（定員／経済学科１４０名、経営学科７０名（内１０名は平成6年度までの期限付））
・看護短期大学部に専攻科設置（助産学専攻入学定員１５名）

1992 4年　12月　1日・医学部実験動物研究教育センター完成

1993 5年　4月　5日・大学の将来構想に関する懇談会提言
9月 30日・市立三大学の統合に関する整備委員会設置（平成７年 12 月 25 日まで）

1994 6年　4月　1日・看護短期大学部専攻科助産学専攻、学位授与機構の認定を受ける

1995 7年　3月 31日・薬学部先端薬学研究施設完成
7月　1日・特定機能病院承認

1996 8年　3月 31日・教養部廃止
4月　1日・人文社会学部設置（人間科学科入学定員５０名、現代社会学科入学定員５０名、国際文化学科入学定員５５名）
・芸術工学部設置（視覚情報デザイン学科入学定員３０名、生活環境デザイン学科入学定員３０名）
・自然科学研究教育センター設置
・経済学研究科附属経済研究所発足

山の畑キャンパス中庭

1999 11年　4月　1日・看護学部設置（看護学科入学定員８０名）
・計算センターを情報センターに名称変更

2000 12年 4月 1日・名古屋市の機構改革により、市立大学が市長直轄となる
・大学院人間文化研究科修士課程設置（入学定員１５名）、芸術工学研究科修士課程設置（入学定員２５名）、システム自然科学研究科修士課程設置（入学定員１５名）
・大学院医学研究科の専攻を再編し、入学定員を５２名（従前２７名）に増員

2001 13年 4月 1日・大学院薬学研究科の専攻を再編し、入学定員を前期課程７２名（従前４５名）、後期課程１８名（従前１３名）に増員
・図書館と情報センターを統合し、総合情報センターを設置
5月 1日・副学長制を導入

2002 14年 3月 31日・看護短期大学部廃止
4月 1日・大学院部局化
・大学院人間文化研究科博士課程設置（入学定員／前期課程１５名、後期課程５名）、芸術工学研究科博士課程設置（入学定員／前期課程２５名、後期課程５名）、システム自然科学研究科博士課程設置（入学定員／前期課程１５名、後期課程５名）

2003 15年 4月 1日・大学院看護学研究科修士課程設置（入学定員１２名）
・大学院人間文化研究科前期課程の入学定員を２５名（従前１５名）に増員

2004 16年 1月 1日・附属病院の病棟・中央診療棟（病床数８０８床）が稼働開始
5月 1日・副学長が増員され、２名となる

田辺通キャンパス

附属病院（平成 15 年完成時）



2005 17年 4月 1日・芸術工学部の学科名称をデザイン情報学科及び都市環境デザイン学科に変更し、各学科の入学定員を４０名（従前３０名）に増員
・大学院経済学研究科の専攻を再編し、入学定員を前期課程４０名（従前は前期課程及び修士課程を合わせて２３名）後期課程１０名（従前５名）に増員
・大学院看護学研究科博士課程設置
（入学定員／前期課程１２名、後期課程５名）

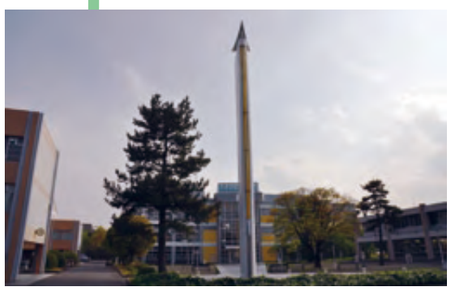
2006 18年 4月 1日・公立大学法人名古屋市立大学設立
・薬学部を再編し、薬学科（６年制課程･入学定員６０名）、生命薬科学科（４年制課程・入学定員４０名）を設置

2007 19年 3月 19日・野外教育施設「蓼名荘」閉館
4月 1日・経済学部を再編し、公共政策学科（定員９０名）、マネジメントシステム学科（定員８０名）、会計ファイナンス学科（定員６０名）を設置（入学定員２００名から２３０名に増員）
5月 7日・附属病院の外来診療棟が稼働開始

2008 20年 4月 1日・大学院医学研究科修士課程設置（入学定員１０名）
・大学院看護学研究科博士前期課程に助産学領域を設置、入学定員を 24 名(従前 12 名）に増員

2009 21年 4月 1日・医学部の入学定員を９２名（従前８０名）に増員
（内２名は臨時定員増で、平成２９年度まで）

2010 22年 4月 1日・医学部の入学定員を 95 名（従前 92 名）に増員（内５名は臨時定員増）
・芸術工学部の都市環境デザイン学科の名称を建築都市デザイン学科へ変更
7月 31日・名古屋市立大学開学 60 周年記念国際シンポジウム ISBDS2010 を開催
10月 28日・名古屋市立大学開学 60 周年


北千種キャンパス

自然科学研究教育センター南・北棟

## 歴代学長

初　代

戸 谷 銀 三 郎

第二代

内 野 仙 治

第三代

木 村　　廉

第四代

萩 野 鉚 太 郎

第五代

高 木 健 太 郎

第六代

柴 田 清 人

第七代

蜂 須 賀 養 悦

第八代

伊 東 信 行

第九代

和 田 義 郎

第十代

西 野 仁 雄

| | | |
|---|---|---|
| 戸　谷　銀三郎 | 昭和25年　4月　1日～昭和32年　3月31日 |
| 内　野　仙　治 | 昭和32年　7月20日～昭和32年　9月20日 |
| 木　村　　廉 | 昭和32年12月10日～昭和38年12月　9日 |
| 萩　野　鉚太郎 | 昭和38年12月10日～昭和46年12月　9日 |
| 高　木　健太郎 | 昭和47年　8月　1日～昭和55年　1月13日 |
| 柴　田　清　人 | 昭和55年　3月24日～昭和63年　3月23日 |

| | | |
|---|---|---|
| 蜂須賀　養　悦 | 昭和63年　3月24日～平成6年　3月23日 |
| 伊　東　信　行 | 平成　6年　3月24日～平成12年　3月31日 |
| 和　田　義　郎 | 平成12年　4月　1日～平成17年　8月22日 |
| 西　野　仁　雄 | 平成17年　9月20日～平成22年　3月31日 |
| 戸　苅　　創 | 平成22年　4月　1日～現在 |



# 大学及び各組織の現状と展望

## 市民の健康と福祉の向上に貢献する大学

本学の中期目標（平成 18 年度～ 23 年度）に掲げる基本的な理念「全ての市民が誇りに思う・愛着の持てる大学をめざす」を実現するため、全学的に「市民の健康と福祉の向上に貢献する大学」をめざす取り組みを進めている。

公開シンポジウム「名古屋の健康まちづくり」

主な取り組みとしては、教育の面では、全学部学生を対象として、テーマ科目（各学部教員の先端的研究テーマをわかりやすく紹介し、その意義と独自性を解説する科目）に「健康・福祉」の区分を設け、充実に努めているほか、平成 20 年度からは、優れた医師、薬剤師、看護師の養成を図るため、医・薬・看の医療系３学部連携による早期体験学習カリキュラムを導入している。また、同カリキュラムは平成 21 年度文部科学省「大学教育・学生支援推進事業」に採択（～平成 23 年度）され、「医療系学部連携チームによる地域参加型学習」としてその内容の充実が図られている。

大学連携講座「くすりの話：科学者から見たお薬最前線」

研究の面では、本学の特別研究奨励費制度を活用し、「健康福祉の向上」に資する研究や「医·薬·看の連携研究」に対する研究費の重点配分を行っている。また、平成 21 年度文部科学省「教育研究高度化のための支援体制整備事業」に「Center for Cancer Research の設立によるがん教育研究高度化の支援」プロジェクトが採択され、医学、薬学、看護学及びシステム自然科学の各研究科が連携してがん教育研究の高度化を推進する体制づくりに取り組んでいる。

社会貢献の面では、附属病院が名古屋都市圏の基幹病院として、最高水準の医療の提供に努めているほか、健康·福祉に関する市民公開講座等の開催、厚生労働省老健局平成 19 年度老人保健健康増進等事業に採択（～平成 21 年度）された「高齢者健康づくり指導者養成セミナー」の開催、平成 20 年度文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に採択（～平成 22 年度）された「名市大 医療・保健学び直し講座」及び「三公立連携薬剤師生涯学習支援講座」の開設など、市民の健康と福祉の向上に積極的に取り組んでいる。

高齢者健康づくり指導者養成セミナー



## 環境問題の解決に挑戦し、貢献する大学
## ～ 「持続可能な社会」の実現に向けて ～

人類共通の課題である「地球環境の保全」に取り組み、「環境問題の解決に挑戦し、貢献する大学」をめざす名古屋市立大学では、学内に設置した環境委員会を中心に、環境憲章の制定、環境マネジメントシステムの構築、アクションプランの策定·実施など様々な取り組みを推進している。

大学の最も重要な使命である学生教育に関しては、学部教育における「持続可能な社会形成コース」、大学院教育における「開発社会学」の開設など環境教育の充実を図っている。

また、学術研究に関しては、行政や他大学とも連携し、環境に関する研究プロジェクトを推進するとともに、科学的知見に基づく環境政策形成への参画、様々な機会を利用しての環境に関する研究成果の公表、国際会議の開催など、地域社会·国際社会への貢献に努めている。

薬学部における自然換気システム

環境負荷の低減に関しても、エネルギー使用量、一般廃棄物排出量の削減を着実に進め、薬学部校舎改築にあたり多くの先進的な環境対策を採り入れるなど環境に配慮した大学運営を行っており、さらに、COP10（生物多様性条約第 10 回締約国会議）開催に向けた支援活動として、生物多様性に関するフォーラム・セミナーの開催、国際的なインターンシップの実施など、市民·企業·学生の意識啓発を図っている。

名古屋市立大学では、今後も「持続可能な社会」の実現に向け、文系·理系の学部·研究科を有する総合大学として、環境問題を様々な観点から捉えた教育·研究活動を展開していく。

医学部基礎教育棟及び図書館と桜の木

北千種キャンパスの哲学広場

# 医学研究科
# 医学部

## 研究科長のメッセージ

医学研究科長・医学部長
白井　智之

昭和 25 年に名古屋市立大学医学部（旧制）が設置されてから今年で 60 周年を迎えました。この間多くの改革を経て、4 年前に独立行政法人化しました。独立行政法人化しても教育・研究体勢には大きな変化はありません。むしろより良い環境整備を行ってきました。過去 60 年にわたって 4,000 名を超える卒業生（医師）を輩出し、名古屋市を中心とした地域の医療に大きな貢献を果たすと同時に多くの先輩諸氏が名古屋市立大学医学部の誇りをもって全国各地で活躍しています。

平成 12 年にはいわゆる医学部の改組が行われ、大学大学院医学研究科が主体の大学院大学となりました。博士課程の定員も 52 名に増員しました。医学部はそれに付随する形になっています。2 年前（平成 20 年）には医学研究科に 2 年間の修士課程をスタートし、この 3 月には 15 名が修了し、その内 3 名が博士課程に進学しました。さらに平成 20 年からは医学部学生の中で医学研究志望者に早くから研究の機会を与え、在学中に研究室で教員の指導の下、研究を行って研究成果を論文にすることを条件に、医学部 6 年と大学院博士課程 3 年で博士号を取得できる MD-PhD コースを新たに設置しました。幸い予想以上の数の学生が参加してくれています。成績の優秀なあるいは前向きに取り組む学生諸君にはできるだけ経済的支援を行うために独自の奨学金制度も設けています。

医療を取り巻く環境が激変しています。地域医療の弱体化、表面化した医師不足、特定の専門医の激減などです。医療におけるこうした問題点を少しでも解消することを目的として国や愛知県の施策にそって本年度（平成 22 年）は入学定員をさらに 3 名増やして 95 名にしました。6 年一貫のカリキュラムを目指して可能な限りカリキュラムの改革を行い、95 名のクラス全員が力を合わせて活躍してくれることを楽しみにしています。医学部、修士課程、博士課程と 3 本の柱から成る医学にかかわる教育と研究体制の充実を計るよう教員一同力を合わせて取り組んでいます。

医学研究科・医学部研究棟



## 年表〜この 10 年の足跡〜

●**平成 12（2000）年　4 月**　大学院医学研究科専攻の再編に伴い、入学定員を 27 名から 52 名に増員

●**平成 14（2002）年　4 月**　大学院部局化

●**平成 15（2003）年　4 月**　分子毒性学 開講

●**平成 17（2005）年　7 月**　名古屋市立大学健康科学講座 オープンカレッジ開講

●**平成 18（2006）年　4 月**　公立大学法人化／医学・医療教育学 開講／再生医学 開講

●**平成 18（2006）年　6 月**　医学研究科・医学部広報誌 瑞医 創刊

●**平成 19（2007）年　2 月**　口腔外科学 開講

●**平成 19（2007）年　4 月**　関節再建医学（寄付講座）開講

●**平成 19（2007）年　8 月**　蝶ヶ岳ボランティア診療班 第 10 回活動

●**平成 19（2007）年　9 月**　名古屋市立大学医学会雑誌と NAGOYA MEDICAL JOURNAL を統合

●**平成 20（2008）年　4 月**　大学院医学研究科修士課程（入学定員 10 名）設置

●**平成 20（2008）年　7 月**　MD - P h D コース 創設

●**平成 20（2008）年 11 月**　明石修三 奨学金 創設／川久保奨学金（MD-PhD コース）創設

●**平成 20（2008）年 12 月**　文科省社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム名市大医療・保健　学び直し講座開講（平成 22 年度まで）

●**平成 21（2009）年　4 月**　医学部の入学定員を 80 名から 92 名に増員（内 2 名は臨時定員増）／地域医療教育学 開講／臨床薬剤学 開講／文科省大学教育・学生支援推進事業医療系学部連携チームによる地域参加型学習（平成 23 年度まで）

●**平成 21（2009）年　8 月**　医療健康政策科学 開講

●**平成 21（2009）年 10 月**　地域医療学（寄付講座）開講

●**平成 21（2009）年 11 月**　第 50 回川澄祭 バトン〜つなげる人、心、50 音のメッセージ

●**平成 22（2010）年　4 月**　医学部の入学定員を 92 名から 95 名に増員（内 5 名は臨時定員増）／周産期・新生児医学（寄付講座）開講

●**平成 22（2010）年　8 月**　地域救急医学（寄付講座）開講

オープンカレッジ

生化学実習

医療系学部連携・地域参加型学習

基礎自主研修発表会

## (この 10 年の足跡と現状)

この 10 年は、名古屋市立大学医学部／医学研究科にとって、かつてない大きな変化の時代であった。平成 2 年代の半ばからの大学の「大学院化」の波がいわゆる「大学院重点化大学」の枠を越えて広がり、医学部を持つ多くの国立大学や有力私立大学で「大学院の部局化（大学院を大学組織の骨格とし学部を従とする)」が進む中で、名古屋市立大学でも平成 13 年度から議論が始まり、平成 14 年度から医学部を始め多くの学部がこの体制をとることとなった。さらに平成 16 年度から国立大学の「法人化」が実施される中で、公立大学に対しても「地方独立行政法人」の枠組みの中での法人化が可能となり、名古屋市立大学も法人化の道を選択することとなった。この時期、全国の公立大学医学部・医科大学でも、法人化の選択とその体制作りに多くの時間とエネルギーが費やされ、本学も学内外の議論を経たうえで、平成 18 年度から、「名古屋市立大学医学部」は、「公立大学法人名古屋市立大学」が運営する「名古屋市立大学」における「大学院医学研究科」が基本組織となり、「医学部の教育も併せて行う」という体制ができあがった。さらに、平成 20 年度には、医学研究科のもとに薬学研究科の一部の研究室を組み入れた「大学院医学修士課程」が発足、大学院を中心とした教育研究体制の充実に進んだ。一方、医学部／学部教育においては、平成 16 年度から「医学教育センター」が発足、専任教員（平成 18 年度から教授）を配置することで、学部カリキュラムの一貫したマネジメントが可能となり、卒後臨床研修を担当する総合研修センターとの併置により新たに発足した新臨床研修制度への対応が計られることとなった。平成 16 年度に開始されたこの新研修制度は医学部学生の卒後進路の選択に劇的な変化をもたらし、大学病院から一般研修病院への研修医の大規模な移動が起こり、全国的に大学病院の診療体制に深刻な影響をもたらす結果となり、その後の様々な「医療制度問題」の引き金になったといえる。この混乱は現在もなお続いている。一方「法人化」により大学独自の判断で新たな教員枠の設定が可能となり、医学研究科においても実験動物研究教育センターを母体の「モデル病態医学」に、また内科の枠組みの中での「総合医学・地域医療学」に新たな教授職がおかれた。こうした中で、平成 18 年末に退職教授が在職時の大学院学位審査に関連した不祥事が起こり、医学研究科に大きな衝撃を与え、大学院教育と学位授与に関わる様々な改善が行われることとなった。平成 21 年度から始まった医学部定員の増員により、平成 21 年度には 85 名、平成 22 年度には 95 名の新入生を迎え入れ、設備の拡充などの教育環境の整備に追われることとなっている。

厚生会館前

医学部基礎棟入口

## (将来の展望)

**地域医療、社会貢献：**

初期研修制度により、若手医師が主として都市部にある研修病院に集中した結果、研修病院となれなかった、あるいは少人数の研修医のみ受け入れ可能の、主として僻地の病院では医療が崩壊状態となっている。この結果、病院の整理統合化など種々の対策が考えられている。名古屋市立大学医学研究科・医学部としても自らの医療を充実することだけにとらわれず、大学の教員をはじめ教室に加わっている若手医師とともに地域医療の維持に全力をあげて貢献していくべきである。また名古屋市の市民の税金により運営されていることを重く受け止め、セミナーなどを通じて市民との交流を図り、医学研究科における各種研究成果を生かして名古屋市民の健康推進、医学知識の啓蒙と、がんなどの疾患の一次予防に努めていく。

**研究：**

＜がん＞

医療、医学はサイエンスの一部である。サイエンスの進歩は目覚ましく、ヒトゲノムの配列決定の後は、がん（悪性腫瘍）を初めとする種々の疾患における細胞の全ゲノム配列の決定などにより従来とは比べものにならない膨大なデータが得られて、これがインターネットを通じて容易に手に入るようになっている。これらのデータを積極的に利用し、基礎的な研究をこれに組み合わせることにより特にがんの領域で名古屋市立大学医学研究科の独自性のある研究を学部横断的に推進し、国際的な実績を積み重ねて行く。がんの基礎研究やトランスレーショナル研究における従来の本大学の実績がそのベースとなり、若手研究者の参加により飛躍的な発展を期待する。

＜再生医療＞

種々の疾患、あるいは手術により失われた臓器機能を補う手段は従来臓器移植に限られてきた。しかし脳死移植ドナーの限界により、救われる生命にも限界があることが明らかとなっている。これに光をもたらすものとして再生医療が脚光を浴びている。細胞や臓器の再生にはiPS 細胞などの多機能分化可能細胞の活用によってその可能性が大きくなっていることが期待されている。しかし臓器の再生には非常に大きなハードルがあり、筋道さえついていない。この領域でのインパクトのある研究を目指して基礎研究を推進する。

**若者：**

大学の力は人である。学生、若い研究者があふれる大学こそ未来に羽ばたく活力の源である。その活気をもって大学をとりまく多くの困難な状況を克服し、明るい希望にあふれた大学、医学研究科・医学部を目指す。

桜山（川澄）キャンパスの桜

医学研究科・医学部研究棟入口

# 薬学研究科
# 薬学部

## 研究科長のメッセージ

薬学研究科長・薬学部長
水上　元

名古屋市立大学薬学部・薬学研究科は、この 10 年間、大きな変革の渦の中にあります。まず第 1 に、ご承知のように、薬剤師の養成を目的とする薬学の教育課程が 4 年から 6 年に延長されました。同時に、これまでの薬学教育が、多様な分野に進む人材の育成と薬学の多くの優れた研究成果の発信を担ってきたことを踏まえて、基礎薬学を中心とした教育を行う現行の修業年限4年の学部・学科を併置することも認められました。これによって、人材養成に関して異なった目的を持つ 2 つの学科が同じ教員集団によって担われるという、他に例を見ない新しい学部制度が誕生することになりました。戦後の学制改革に並ぶ大きな変革とも言うべき新しい薬学教育制度が施行された平成 18 年は、くしくも名古屋市立大学にとっても公立大学法人として出発するという大きな節目の年でした。この制度改革に対応して、名古屋市立大学は薬剤師養成も目的とする 6 年制の薬学科（定員 60 名）と創薬分野の研究者・技術者養成を目的とする 4 年制の生命薬科学科（40 名）を設置し、新しい制度のもとでの薬学教育に踏み出しています。平成 18 年 4 月に入学した新制度一期生は、薬学科では現在 5 年生として臨床実務実習の真っただ中におり、生命薬科学科では最初の卒業生が大学院博士前期課程の 1 年生として研鑽を続けています。

薬学部この 10 年の第 2 の大きな出来事は、長年の懸案であったキャンパスの改築がようやくスタートしたことです。平成 20 年から平成 21 年にかけて新実習棟、新研究棟が完成し、来年度からは新講義棟、厚生棟の建築がスタートします。平成 25 年には全く新しい薬学キャンパスが誕生する予定です。改築を強力に推進いただいた歴代の学長（理事長）、理事、事務局の方々、財政難にもかかわらず建設工事を認めていただいた名古屋市当局及び名古屋市民の皆様に改めてお礼を申し上げます。幸い、新校舎の改築計画と新教育制度の設計時期が重なったために、新しい校舎と設備を新しい薬学教育制度に完全に対応したものとすることができました。

田辺通キャンパス

新しい教育制度と新しい学舎のもとで、125 年を超える伝統を活かして、すばらしい人材と研究成果を世界に送り出していく決意です。皆様方の一層の御支援をお願い申し上げます。



## 年表～この 10 年の足跡～

●**平成 13（2001）年　4 月**　大学院薬学研究科の専攻を 1 専攻（薬学）から 2 専攻（創薬生命科学・医療機能薬学）へ再編し、入学定員を前期課程 72 名（従前 45 名）、後期課程を 18 名（従前 13 名）に増員

●**平成 14（2002）年　4 月**　大学院部局化／シドニー大学健康科学カレッジ及び南京医科大学と学術交流協定を締結

●**平成 18（2006）年　4 月**　公立大学法人化／薬学部改組により 6 年制課程の薬学科（定員 60 名）と 4 年制課程の生命薬科学科（定員 40 名）に再編成／臨床薬学教育研究センター設置

●**平成 19（2007）年　7 月**　薬学研究科施設大改築の第 1 期工事開始

●**平成 20（2008）年　4 月**　愛知県がんセンター及び国立長寿医療センターとの連携協定に基づき、連携 2 分野開設

●**平成 20（2008）年　9 月**　名古屋工業大学大学院との協定に基づき、薬工連携講義等の事業を開始／文部科学省 大学院教育改革支援プログラム、戦略的大学連携支援事業、社会人学び直しプログラムでそれぞれ 1 課題が採択（各 3 年間）

●**平成 20（2008）年 11 月**　新学生実習棟完成

●**平成 21（2009）年　9 月**　新研究棟完成・全研究室移転

●**平成 22（2010）年　4 月**　大学院博士前期課程再編により 1 専攻（創薬生命科学）が入学定員 36 名で発足

課程概念図

研究活動

新実習棟

## (この 10 年の足跡と現状)

NMR

**大学組織の改革**　平成 13 ～ 22 年の 10 年間は、日本の国公立大学にとって、非常に大きな組織上の変革の時代であった。まず国立大学から始まった大学院を大学組織の中心に据えるという大学院重点化が、公立大学にも大学院部局化という形で波及した。薬学研究科はそれに先立ち大学院教育の拡充（専攻を 1 から 2へそして定員増）と充実を図り、研究機器整備にも力を入れてきた。さらに大きな変革として国立大学法人化に続いて、名市大も平成 18 年から公立大学法人化されたことにより、大学の意思決定や施策遂行の方式が大きく変わった。

薬草園

**薬学教育の改革**　日本の薬学教育において長年の課題であった臨床薬剤師養成教育の見直しという見地から、6 年制学部教育が平成 18 年から始まった。名市大薬学部では国立大学と同様に、主に薬剤師養成を目指す 6 年制（定員 60 名）の薬学科と、主に研究者・技術者養成を目指す 4 年制（定員 40 名）の生命薬科学科という、修了年限が異なる2つの学科制を導入した。そして、6 年制の長期実務実習および臨床教育を円滑に実施するため、充分に薬剤師実務経験を積んだ教員を採用して臨床薬学教育研究センターを設置した。また模擬薬局など新たな学生実習内容に対応した斬新な学生実習棟が建設され、平成 20 年 12 月から大いに活用されている。さらに、文部科学省戦略的大学連携支援事業（大学 6 年制を主軸とする薬系·医系・看護系大学による広域総合教育連携）及び社会人の学び直しプログラム（三公立連携薬剤師生涯学習支援講座）に採択され、地域の指導的薬剤師育成の拠点形成を目指した活動が本格化している。

病院実習

**教育・研究システムの充実と研究棟大改築**　薬学部 4 年制生命薬科学科は大学・公的研究機関・製薬企業などに向けた研究者・技術者としての人材養成を主な目的としているため、殆どの学生が大学院博士前期課程へ進学する。そこで平成 22 年度から前期課程を改組し、定員 36 名の創薬生命科学科 1 専攻として再出発した。そして平成 21 年 10 月をもって旧研究棟から同じ敷地内に新築された新研究棟へ全分野（研究室）が移転し、新たな研究設備の利用が可能となった。さらに平成 20 年から 3 ヵ年文部科学省の大学院教育改革支援プログラム（薬工融合型ナノメディシン創薬研究者の育成）に採択された。これらの大きな進展は新規の教育研究体制の始まりと同期しており、非常に時機を得たものとなった。現在、名古屋工業大学大学院、愛知県がんセンター、国立長寿医療センターとの連携のもと、薬学研究科での基礎薬学研究・教育体制の益々の充実を図っている。



## (将来の展望)

　薬学部 6 年制と 4 年制の 2 学科併設は、生命科学や合成化学を基盤とした基礎薬学 / 創薬分野から、臨床現場での薬の適正使用に関する臨床薬学分野までの薬学関連の全分野での幅広い人材育成を図るために必須であった。平成 22 年度から他学部を含む 4 年制学科の卒業生を対象として、研究科改組により大学院実質化に対応した新規カリキュラムで博士前期課程創薬生命科学専攻の教育が開始されている。2 年後の 24 年度には新たな魅力ある内容（カリキュラムや学生支援など）を持った 3 年制博士後期課程創薬生命科学専攻を設置することになる。薬学及び関連領域の研究者・技術者としての優秀な人材を社会に輩出するという目的を果たし、志望者に魅力あるものとするためには、博士前期·後期課程ともに、出口（就職·進学等）の進路開拓・充実をさらに図る必要がある。

　一方、高い臨床研究能力を持った指導的薬剤師の育成という本薬学研究科に課せられたもう一つの重要な使命を充分に果たすためには、主に 6 年制卒業者を対象とした博士課程設置が必須であることから、平成 24 年度には薬学研究科に年限の異なる（4 年制）別の博士課程専攻科を設置することになる。同時にこの博士課程

研究棟

実習棟のキャンパスモール

は、旧 4 年制卒業後あるいは旧博士前期課程修了後、医療現場で活躍している薬剤師のための社会人大学院としての役割も果たす必要があり、充分な準備の下に魅力ある教育システムを確立することが求められている。

　上記のように、薬学教育がカバーするべき領域の多様化、専門化が生じている現状に対して、限られた本研究科教員数で対応するために、また国際化を図るためにも、国内外の他大学・他施設との積極的・戦略的な連携が欠かせない。また基盤となる設備の改善として、講義棟・アメニティ施設の大改築が予定されており、その完成が待たれる。

全体パース

# 経済学研究科
# 経済学部

## 研究科長のメッセージ

経済学研究科長・経済学部長
井上　泰夫

本年、名古屋市立大学は開学 60 周年を迎えていますが、経済学部に限って言えば、開学 46 周年になります。医学部、薬学部と少し遅れて生まれたわけですが、現在の部局構成から言えば、旧い方の学部になります。高度成長の真っ只中において東海経済圏にすぐれた人材を輩出することを目的にして生まれたのが、経済学部であると言われています。たしかに、すでに現役生活を退き始めている本学の卒業生は、企業、官庁、あるいはそのほかの分野で第 1 線の役割を果たしています。日本経済が基本的に右肩上がりの局面であったとは言え、絶えず直面する新たな課題に対して、優れた適応力を示してきたわけです。

これに対して現在の我々の立ち位置ははるかに難しくなっています。日本経済全体が財政赤字、非正規雇用の増大、少子・高齢化というように成長抑制要因を数多く抱えるに至っているからです。このような社会の変化にともなって、経済学部、そして経済学研究科の果たすべき役割も当然変わることになります。より着実に名古屋市の市民の皆さんに喜んでもらえるような学部、研究科にすることが何よりの課題であります。とは言え、教育、そして大学における教育とは、きわめて時間のかかる作業であることも事実です。つまり、一時的なパフォーマンスだけで教育を評価できるわけではありません。どうか、市民の皆さんが長い目で見ていただいて、経済学部、経済学研究科の存在意義を一層認知していただくことをお願いいたします。

3 号館（経済学部棟西側）

滝子（山の畑）キャンパスに集う学生

1 号館（人文社会学部棟）から 3 号館（経済学部棟）を眺める



## 年表～この 10 年の足跡～

●**平成 12（2000）年　2 月**　社会人大学院 10 周年記念市民公開講座スタート（翌年以降毎年 9 月開催）

●**平成 12（2000）年 10 月**　中国社会科学院日本研究所と「第 4 回日中経済学術交流会議―新世紀における日中経済関係の構築」を共催

●**平成 13（2001）年　4 月**　大学院教育の充実（学位論文の作成のための公開セミナー制度、課程博士の制度整備）

●**平成 14（2002）年　4 月**　大学院部局化

●**平成 16（2004）年 12 月**　学部創立 40 周年記念事業

●**平成 17（2005）年　3 月**　大学評価・学位授与機構による研究評価においてほぼ最高の評価を得る

●**平成 17（2005）年　4 月**　大学院 2 専攻体制スタート（経済政策分析専攻・日本経済経営専攻）

●**平成 18（2006）年　4 月**　公立大学法人化

●**平成 19（2007）年　4 月**　2 学科（経済・経営学科）から 3 学科（公共政策学科、マネジメント・システム学科、会計ファイナンス学科）へ　定員増（200 人から 230 人へ）

●**平成 20（2008）年　4 月**　大学院の専攻名を経済学専攻と経営学専攻に変更

●**平成 21（2009）年　4 月**　学部教育に「共通演習」導入／学部学生による大学院講義科目の履修スタート／剣陵会提供大学院寄付講義スタート

●**平成 22（2010）年 11 月**　経済学研究科創設 40 周年・社会人大学院 20 周年記念事業／経済学研究科予算大幅増

経済学部オープンキャンパス

3 号館 201 教室

経済学部講義風景

## (この 10 年の足跡と現状・将来の展望)

　この 10 年間、経済学研究科、経済学部は前ページの年表が示すように、大学院の部局化、大学の独立法人化という大きな動きの中で、組織的な拡充を実現することができた。これらの動きは歴史的とも言えるもので、本年を以って学部創立 46 周年を迎える経済学部の歴史のなかでもとくに大きな変化が相次いで起こった時期である。そのなかで経済学部、そして経済学研究科の定員が増加したことは組織にとって大きなアピール要因である。

平成 22 年・ソテツと学生会館

夏休みのキャンパスにて

平成 17 年・冬の日の朝

平成 16 年・春眠暁を覚えず

　ただし、この拡充は量的なものだけではなく、質的な充実をともなっている。従来の修士課程の社会人大学院に加えて博士後期課程にも社会人コースが設置されたうえ、学部が 3 学科に再編成されたことによって、学生の具体的なニーズに対応できるようになっている。伝統的に経済学科、経営学科という 2 学科制が国立大学の経済系の学部の特徴であり続けていることを見れば、これは大きな変化である。

　この 10 年間このように時代の流れを敏感に感じつつ組織として対応してきたわけであるが、だからと言って今後について楽観的な展望を抱けるわけではない。財政赤字という暗雲が日本経済全体に重くのしかかっている現在、公立大学、なかでも文科系の学部、研究科への風当たりには厳しいものがある。それに対して、組織としての対応はついつい遅れがちになる。そうだとすれば、やってきてからの対応が遅すぎることのないよう、平時においてこそ、リスク管理を徹底させる必要があるだろう。名古屋市民の大学として我々が市民に対してどのような大学教育サービスを提供できるのか。まさに原点に立ち返って省察すべきときである。

就職懇談会にて経済学部 OBOG のお話を聞く

ビジネス IT 講座

平成 16 年秋・中庭の木々も色づく

天高く．．．．３号館（経済学部棟）から秋空を見上げる

３号館（経済学部棟）の西側はひそかな桜の名所

# 人間文化研究科
# 人文社会学部

## 研究科長のメッセージ

人間文化研究科長・人文社会学部長
藤田 榮史

今年度（平成 22 年度）に人文社会学部は設立以来 15 年目、大学院人間文化研究科は昨年度に 10 年の節目を迎え、人間に例えるならば「青年期」の成長段階に入っています。学部一期生は 30 歳代半ばに達し、社会・経済の第一線で活躍する姿を見せています。人間文化研究科の修了生も、大学・高専などの教職に就いたり、市民社会組織の各方面で力を発揮しています。地域社会と連携した教育研究の発展を目指し、地域に密着した学部・大学院として、また、同窓生がリカレント教育の場として活用できる同窓生と結びついた教育研究組織として、学部・大学院の「大人期」に向けた成長を図りたいと考えています。

現代社会は、根本的な変革を迫られています。持続可能で格差を生み出さない経済成長パターンをグローバルな規模で模索し、多様性を豊かに包摂する社会·文化を育み、信頼と連帯に支えられた「共に生きる」社会を作り出すことが課題になっています。科学・技術が産業と政府の技術政策とに不可分に結びつけられ、社会生活だけではなく人間存在そのものに直接に影響を及ぼす時代となり、科学·技術がもたらす「社会的リスク」を検討し、市民的対話を通じて問題の解決へと接近するために、人文·社会科学の知見と批判的機能が求められています。

困難な状況にあっても、豊かで人間らしく尊厳をもって、文化的に生きたい、そうした人間の営みが粘り強く継続されてきました。人間のこうした営みを基盤とした知的模索の蓄積が、人文・社会科学の本質にほかなりません。人間の根源的な願いに応えようとする知的探求の蓄積を継承・発展させ、豊かで人間らしい生き方（well-being）と持続可能な地域社会・地球社会を創造していく担い手を生み出すことを、人文社会学部・人間文化研究科はこれからも目指します。

人間文化研究所の学内研究会「マンデーサロン」で講演中の吉田教授

1 号館（人文社会学部棟）



## 年表〜この 10 年の足跡〜

●**平成12（2000）年 4月** 大学院人間文化研究科博士前期課程開設／社会調査士資格制度（社会調査協会）へ参加

●**平成14（2002）年 4月** 大学院部局化／大学院人間文化研究科博士後期課程開設／名古屋市総務局と覚書を交わし名古屋市男女平等参画インターンシップを開始（2005 年度から単位化）

●**平成15（2003）年 1月** 『（大学院人間文化研究科）人間文化研究』創刊号発行

●**平成15（2003）年 4月** 幼稚園教諭免許状取得課程を設置／大学院人間文化研究科が部局化

●**平成17（2005）年 4月** 附置研究所として人間文化研究所設立

●**平成18（2006）年 3月** 『人間文化研究所年報』創刊号刊行

●**平成18（2006）年 4月** 公立大学法人化／中高教諭免許状取得課程を設置

●**平成19（2007）年 4月** 社会福祉士国家試験受験資格課程を設置／長期履修制度（人間文化研究科）施行

●**平成19（2007）年 6月** 第 1 回 Human&Social サイエンスカフェを丸善（名古屋栄店）にて開催（以後、原則第 3 日曜日に定期開催）

●**平成19（2007）年 9月** 「市民学びの会」発足／クィーンズ大学の国際スタディ・センターに学生派遣開始／「社会調査インターカレッジ発表会」を開始（名市大·名大・岐阜大・愛知大など共催、社会調査協会後援）

●**平成20（2008）年 8月** 国際文化学科で「海外フィールドワーク実習」開始

●**平成20（2008）年 9月** 国際交流推進センターを人文社会学部棟内に開設

●**平成21（2009）年 9月** 人間文化研究所移転（1 階から 7 階へ）

心理実験中の人間科学科学部生

社会調査インターカレッジ発表会（2007）で調査報告する現代社会学科学部生

バングラディシュで活動中の国際文化学科学部生

サイエンス・カフェで講演中の山本准教授

## (この 10 年の足跡と現状・将来の展望)

平成８年発足の人文社会学部は今年度、設立後 15 年目を迎える。「豊かで人間らしい生き方（ウェルビーイング well-being）の探求」を学部の設立理念に掲げ、「人文科学・社会科学の諸分野について学び、今日の人間、社会、文化に関わる課題について研究して、それを社会に役立てる人材」、「現代の地域社会や国際社会が直面する複雑な諸問題を多面的に考察し、実践的に解決していく知を身につけた人材」、「少人数教育によって、発表･討論能力や構想力･文章表現力を身につけた人材」の育成に努めてきた。歴史の浅い学部だが、現在では、愛知、岐阜、三重から多数の優秀な学生が入学する学部へと発展し、また、地域の民間企業、自治体などへ卒業生を送り出す、地域密着型の学部へと成長してきた。

また、大学院人間文化研究科は人文・社会科学の多様な専門領域にわたる学際的な大学院として、平成 12 年度に博士前期課程、平成 14 年度に博士後期課程を開設し、学部からの進学者、留学生とともに、社会人が多数学ぶ特色ある大学院として、今日に至っている。昼夜開講制を発足時からとり、「長期履修制度」を 平成 19 年度から導入したこともあり、キャンパスの地理的利便性を生かして社会人が、仕事や社会的活動に携わりながら専門的な研究をすることができる公立大学院として、貴重な存在となっている。また、大学・高専に職を得て活躍する者を輩出し、地域の専門職として、あるいはＮＰＯ等の社会的活動でリーダー的役割を果たす修了生を生み出してきた。

米バックネル大学で日本語を教える学部生

人文社会学部・人間文化研究科は、医学部、薬学部、看護学部、経済学部など実学的な色彩の強い名古屋市立大学の学部構成の中で、唯一実学的な色彩が薄い学部・大学院である。したがって、名市大の総合大学としての魅力を高め、市民的教養の教育の役割を期待されている学部・大学院として、その独自性を発揮することが求められている。私たちは全学の共通教養教育において一定の役割を果たしているが、その独自性を一層教育研究に具体化し、学部・大学院のアイデンティティを名古屋市立大学の中に定着させていくことは今後も追求すべき課題である。

人文社会学部は、伝統的な学問分野別に構成されている法学部、経済学部、教育学部等々の既存学部とは異なり、学際的な教育体系を特徴とする構成を学部設立時からとっている。既存ディスプリンの専門的知見とともに、学際的に学ぶことができるという点でも、名古屋市立大学の中では独自性が強い学部である。「ウェルビーイング（well-being）の探求」という基本理念に沿い、子どもを中心にした発達の支援、社会的協働支えられた「共に生きる」社会の追求、異文化間の交流と共生などのテーマに即して、学際的に学ぶことができる学部構成をとっている。学際的に学ぶと同時に、一つの専門分野を学部レベルの水準で学ぶことが可能な教育体系は、既存の学部の枠組みからみると分かりにくいとみられがちである。「ウェルビーイング（well-being）の探求」という理念を「持続可能な（人類）社会をつくる教育」（ＥＳＤ）として焦点を明確にして具体化し、教育研究活動を発展させ、その成果をより目に見える形でアピールしていくことが求められている。

学際的なカリキュラム、少人数教育や地域と連携した教育の試み、教員の学会や研究会での活躍、サイエンス・カフェや「市民学びの会」など市民と共に学ぶ場づくり、こうした教育研究の内容は質量ともに優れたものが多くある。私たちの教育研究の特徴を広く知ってもらい、多くの学生・市民にとって魅力的に感じられるものへと、今後発展させていきたいと考えている。

### 大学院修了生・在学生が出版した著書の紹介

民俗的行事が盛んな故郷小千谷と、民俗学者折口信夫が西脇順三郎の作詩に与えた影響についての考察。

**太田　昌孝**
『西脇順三郎と小千谷ー折口信夫への序章』
風媒社 2008

哲学の知恵に学ぶ仕事術。ノウハウではなく、本質的な思考力を養うための手引き

**小川　仁志**
『「哲学頭」の仕事術ー仕事のプロは考える』
海竜社 2009

人生を変えたい人のためのガイドブック。夢を実現するための「転身力」とは？

**小川　仁志**
『市役所の小川さん、哲学者になる　転身力』
海竜社 2009

国交回復後の中国残留婦人や残留孤児の帰国や自立に関する研究書。
※『飯田歴研賞』『愛銀教育文化財団助成の記』受賞（2008 年度）

**山田　陽子**（編集委員・分担執筆）
『満州泰阜分村 170 年の歴史と記憶』
不二出版 2007

中国残留日本人に関する社会学的研究から、現代の日本に残された課題を考察する。

**山田　陽子**（分担執筆）
『中国残留日本人という経験ー「満州」と日本を問い続けて』蘭 信三編 勉誠出版 2009

「狂俳」という江戸時代後期から東海地方で受け継がれている俳諧の成立と展開についての研究書。

**冨田　和子**
『尾張狂俳の研究』椙山女学園大学研究叢書 31
勉誠出版 2008

17 世紀に民衆の毛髪で曼荼羅を縫っていた謎の僧侶、空念。人物像と人物像と曼荼羅に込められた意味にせまる。

**日沖　敦子**
『毛髪で縫った曼荼羅ー漂泊僧　空念の物語ー』
新典社 2010

哲学者ヘーゲルの国家論が国家のためではなく、市民のためのものであったことを説く。

**久田　健吉**
『ヘーゲル国家論の原理ー「市民自治」と「市民倫理」』
晃洋書房 2009

日本語を効果的に学ぶための歌の教材。音楽に合わせて歌いながら、文法や文型を学ぶことができる。
※ 2009 年に台湾語版、中国語版出版

**吉田　千寿子**
『日本語で語り合おう！』
アスク 2006

# 芸術工学研究科
# 芸術工学部

## 研究科長のメッセージ

芸術工学研究科長・芸術工学部長
横山　清子

芸術工学部は、『「感性」「技術」「人間理解」を修得した総合デザイナーの育成』を教育理念として、平成８年４月に発足し、本年で 15 年目を迎えます。平成 12 年に大学院芸術工学研究科修士課程が、平成 14 年に博士後期課程が設置されました。巣立った卒業生も 700 名以上となり、それぞれが学部・研究科で学んだことを活かし、デザイナーや建築家、情報技術者、公務員などとして活躍しています。若い学部ですが、社会的な認知度も少しずつ高くなっていると考えています。

発足当初は、デザイン都市名古屋に位置することから、「都市景観」を、医学部、薬学部、看護学部を持つ大学に設置されていることから「健康・福祉」を教育、研究のキーワードに掲げて、「視覚情報デザイン学科」と「生活環境デザイン学科」の２学科で構成されていました。従来のデザイン学科や建築学科とは異なる学問分野の組み合わせによる学際的なカリキュラムで、芸術工学の教育理念の実現を目指しました。その後、平成 17 年の学科改組を経て、現在は「デザイン情報学科」と「建築都市デザイン学科」の２学科、そして、大学院は「デザイン情報領域」と「建築都市領域」の２領域になっています。デザイン情報は、製品、グラフィック、映像などのデザインと Web アプリケーションやソフトウェアの開発等を対象とした理論と実技の教育、研究を行っています。建築都市は、建築設計、構造、環境、都市・地域を対象とした理論と実技の教育、研究を行っています。

「芸術工学」を専門として学ぶことができる大学は、全国に数校しかありません。工学とデザインの学際領域でなくてはできない独創的な研究を実施し、多面的視点から工学技術とデザイン実践をバランスよく応用できる特徴的な人材を輩出することで、名古屋市と、そして広く国際社会におけるデザイン及び工学分野への貢献ができれば幸いと考えております。

芸術工学棟アトリウム



## 年表～この 10 年の足跡～

●**平成 12（2000）年　４月**　大学院芸術工学研究科修士課程設置（入学定員 25 名）

●**平成 13（2001）年　１月**　トリノ工科大学との大学間交流協定締結

●**平成 14（2002）年　４月**　大学院部局化／大学院芸術工学研究科博士後期課程設置（入学定員５名）／大学院芸術工学研究科（修士課程）を（博士前期課程）に名称変更

●**平成 17（2005）年　４月**　大学院芸術工学研究科博士前期課程の領域を３領域（ビジュアルデザイン工学領域、地域環境計画領域、生活空間設計領域）から２領域（デザイン情報領域、建築都市領域）に改組／芸術工学部両学科の名称について（視覚情報デザイン学科、生活環境デザイン学科）を（デザイン情報学科、都市環境デザイン学科）に変更し、併せて学生定員について各学科 30 名を 40 名に増員

●**平成 18（2006）年　３月**　芸術工学部創立 10 周年記念誌発行

●**平成 18（2006）年　４月**　公立大学法人化

●**平成 19（2007）年　９月**　名古屋商工会議所冠講座 奥山清行氏による特別講演開催

●**平成 20（2008）年　６月**　名古屋商工会議所冠講座「デザインと持続可能な未来社会」開始

●**平成 20（2008）年　８月**　第１回ＮＡＧＯＹＡ環境デザイン国際ワークショップ・国際会議（ＩＷＡＳＥＤＡＮ２００８）開催

●**平成 21（2009）年　４月**　芸術工学研究科附属環境デザイン研究所設置

●**平成 22（2010）年　２月**　第２回環境デザイン国際ワークショップ開催

●**平成 22（2010）年　４月**　芸術工学部都市環境デザイン学科の名称を建築都市デザイン学科に変更

モーションキャプチャー

EWS 室

名商冠講座ポスター

## (この 10 年の足跡と現状・将来の展望)

平成８年の学部設置から４年が過ぎた平成 12 年には、大学院芸術工学研究科修士課程が、平成 14 年には博士後期課程が設置され、平成 17 年に大学院が完成年を迎えた。その意味では、この 10 年間は、前半が研究科の創設期、後半が学部・研究科の成長期にあたる。

平成 17 年には、研究科の領域を構成する学問分野と学部の学科を構成する学問分野を同一にすること、及び、領域、学科の専門性を高めることを目的とした、領域及び学科の改組と学科名称変更を行った。学科定員も 30 名から 40 名に増員した。

大学院の設置・完成により、大学院生による学会での口頭発表、国際学会での発表、論文誌への投稿など、芸術工学分野での研究活動が活発化してきている。工学理論とデザイン実践のバランスを保つ教育の成果として、プロダクト、

工房

建築、CG、映像、グラフィックなど各種分野のデザインコンペにおける大学院生や学部生の多数の受賞実績が得られているのは、本学部・研究科の特徴である。また、多くの学生・院生が本研究科教員の指導の下、病院や福祉施設の装飾、地場産業振興に寄与する作品制作、子どもを対象としたデザインワークショップの指導補助など、学部・研究科で学んだ知識やデザイン手法を活用して、地域・社会貢献するプロジェクトに非常に積極的に参画していることも特徴である。

成長期に入った後半５年間の特記すべき事項として、平成 20、21 年度に実施された環境デザイン国際ワークショップ、名古屋商工会議所冠講座の開設、環境デザイン研究所の設置があげられる。

国際ワークショップについて、平成 20 年度は「NAGOYA 環境デザイン国際ワークショップ・国際会議　－未来社会のデザインと創造」として、海外から 20 名の教員を招聘し、本学学生と海外大学の学生混合で構成された９グループのワークショップが、８月４日から９日まで６日間、約 200 名の学生の参加で実施された。平成 21 年度は、平成 22 年２月 18 日から 23 日まで６日間、海外４大学からの招聘教員により４グループに分かれて数十名の学生参加によりワークショップが実施された。これは、芸術工学の立ち位置から「環境」に関わる諸問題の解決を、国際的視野で考え、デザインによる具現化を試みる貴重な機会であった。

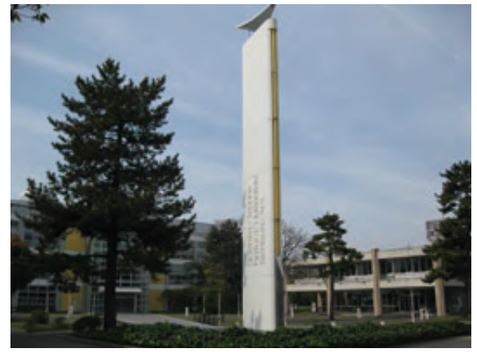
名古屋商工会議所が平成 18 年に策定した提言書『「世界都市」を創る都市型産業』に記載されている項目の一つ、「文化・デザイン系産学連携の推進」実現のために実施された名古屋商工会議所冠講座「デザインと持続可能な未来社会」は、平成 19 年開催の奥山清行氏特別講演とワークショップをプレイベントとして、以降現在まで毎年実施されている。講義は、産業界、官界の最先端でご活躍の講師を招聘し、愛知学長懇話会単位互換科目として多数の県内大学生の聴講を受け入れている。今年平成 22 年は、映像、グラフィックなどのデザイン業界から講師を招聘する。著名なアニメ作家、映画監督、アナウンサーによる講演も予定している。

「環境」に関わる芸術工学研究科における研究、社会貢献、教育を強化するため、それを専門領域の枠組みを超えて実施する体制として、環境デザイン研究所が平成 21 年に設置された。２年目に入る今年、研究所主催の公開講座、シンポジウム等の実施を予定し、本格的に始動する。

芸術工学研究科の完成後６年が過ぎ、創設期の「芸術工学とは何？」から、少しずつ「芸術工学だからできる」あるいは「芸術工学でなければできない」研究と人材育成の実現へ移行してきている。他大学に殆ど例がない学部である、即ちオンリーワンであることを大切にし、また、その特徴を主張することで、「環境」と「健康・福祉」、そして、その他社会が抱える諸問題の解決に、芸術工学の視点と手法で挑戦し、名古屋市、そして、国際社会への貢献を目指したいと考えている。

音響デザイン室

北千種キャンパス（芸術工学棟）



芸術工学部キャンパス

さくら（芸術工学部キャンパス）

芸術工学棟ロビー

# 看護学部
# 看護学研究科

## 学部長のメッセージ

看護学部長・看護学研究科長
山田　紀代美

名古屋市立大学看護学部は，名古屋市立大学の第６番目の学部として，平成 11 年に現在の桜山キャンパスに開設いたしました。看護学部の教育理念は，人間の尊厳を理解し，看護を通じて保健・医療・福祉に貢献できる人材を育成することであり，高度な専門的知識と技術をもった人間性豊かな人材の輩出を目指してスタートいたしました。平成 15 年４月には大学院看護学研究科修士課程が開設（後に博士前期課程と改称）され，平成 17 年４月には博士後期課程も設置されました。また，平成 20 年度には，前期課程に助産学分野が追加され，専門看護師課程（クリティカルケア看護）のカリキュラムが認定を受けることができました。これにより，学部生 320 名，大学院生 63 名，教職員 45 名を擁する学部から大学院までの９年間の一貫した看護学の教育・研究機関としての体制が整いました。

毎年優秀な学生を迎えることができ，10 年間で学部卒業生は 560 名余りに上り，名古屋市内の病院をはじめ，全国の保健医療福祉関連の施設，さらにアメリカなど海外においても本学部での学びを生かして社会に貢献しております。研究科におきましても，臨床や地域における課題解決への取り組みやその解決方法の学問的構築等を習得した修了生はおよそ 60 余名となり，臨床や教育機関で徐々にその能力を発揮しつつあります。

研究面においても教員個々人が健康の維持や回復に貢献するテーマを持ち、成果を上げるべく取り組んでおります。社会貢献につきましても，大学主催の公開講座はもとより，平成 18 年より看護学部独自の事業として地域の看護職を対象とした「なごや看護生涯学習セミナー」を開講，地域のニーズを把握した活動を行っております。名古屋市立大学が 60 周年を迎える中，学部開設から十年余の今日，看護学部の充実した教育・研究及び社会貢献の活動の様子を皆様にご報告出来ることは幸いに思います。これには，多くの皆様のご理解とご協力の賜と心より感謝申しあげます。

今後も，これまでの方法を踏襲するだけではなく，人々の健康・福祉に貢献する教育・研究・社会貢献等について新たな方針や戦略を立て，教職員及び学生それぞれがその目標に向かい鋭意努力してまいりたいと思っております。今後の看護学部の益々の発展のために，皆様方のこれまでと変わらぬご指導とご支援，ご鞭撻をお願い申しあげます。



## 年表～この 10 年の足跡～

- **平成 11（1999）年　４月**　学部開設
- **平成 12（2000）年 10 月**　大学院修士課程設置準備委員会
- **平成 14（2002）年　８月**　学部カリキュラム変更申請
- **平成 14（2002）年 11 月**　文部科学省より看護学研究科修士課程設置認可あり
- **平成 15（2003）年　３月**　第一回生 73 名が卒業
- **平成 15（2003）年　４月**　学部の新カリキュラムでの教育開始／大学院看護学研究科修士課程開設
- **平成 15（2003）年　５月**　大学院博士後期課程設置準備検討委員会始動
- **平成 16（2004）年 11 月**　文部科学省より大学院看護学研究科博士後期課程設置認可あり
- **平成 17（2005）年　３月**　第一回生９名が修士課程修了
- **平成 17（2005）年　４月**　大学院博士後期課程開設，同時に修士課程を博士前期課程と改称
- **平成 17（2005）年　６月**　助産師教育の大学院化準備開始
- **平成 18（2006）年　９月**　大学院博士前期課程における専門看護師教育の検討開始
- **平成 19（2007）年　４月**　大学院博士前期課程の専門看護師（クリティカルケア看護）教育開始
- **平成 19（2007）年　５月**　学部カリキュラムの検討開始
- **平成 19（2007）年　８月**　文部科学省へ大学院助産学領域設置の認可申請
- **平成 19（2007）年　８月**　カリキュラム変更申請
- **平成 19（2007）年 12 月**　文部科学省より，大学院助産学領域設置認可あり
- **平成 20（2008）年　３月**　博士（看護学）学位授与者　２名誕生
- **平成 20（2008）年　４月**　学部新カリキュラム開始／大学院助産学領域開始／専門看護師教育課程許可申請の準備開始
- **平成 20（2008）年　７月**　専門看護師（クリティカルケア看護）カリキュラム許可申請
- **平成 21（2009）年　１月**　カリキュラム承認
- **平成 21（2009）年　５月**　西棟準備委員会始動
- **平成 22（2010）年　３月**　西棟実習室，講義室完成／大学院助産学領域２名修了

学生集合写真

学部学内演習（洗髪）

学部学内演習（静脈注射）

教員集合写真

## (この 10 年の足跡と現状)

名古屋市立大学看護学部は、平成 11 年に開設され、その翌年の平成 12 年には、学部の将来構想として大学院設置は必要不可欠との判断から学部設置からわずか 1 年余で大学院の検討・準備が始められた。平成 13 年度以降には、大学院設置準備委員会により、看護学研究科設置の趣旨、教育目標、教育内容の検討、予算要求、指導教員等の確保などが進められた。そして、平成 15 年 4 月、保健医療現場の今日的問題状況に専門的に対応することのできる看護職者の育成と将来の看護学教育を担うとともに研究者として看護学の発達に寄与する人材の育成を目的に、感染予防看護学、精神保健看護学、成育保健看護学、性･生殖看護学、臨床保健看護学、地域保健看護学の 6 分野を大学院教育課程の柱として、看護学研究科修士課程が開設された。

しかし、時代は看護学分野においても優れた判断力と実践力を有する看護専門職者の育成並びに看護学全般に周知し看護の新たなケアシステムの創造を成しうる高度看護専門職者の育成が急務となっていた。そこで、社会のニーズに対応できる高度看護専門職者及び看護学の教育・研究者の育成、看護学の教育・研究の基盤となる高等教育機関として、博士後期課程の設置が緊急課題として浮上し、平成 15 年 4 月末には、博士後期課程設置のための話合いが始められた。その後、博士後期課程の基本構想、実施計画、施設設備計画についての検討が継続して実施され、平成 16 年 6 月には課程変更認可申請書の提出に至り、ついに平成 17 年 4 月、3 名の入学者を迎えて博士後期課程をスタートした。これにより、学部から博士前期課程、博士後期課程に至るまでの看護学の 9 年間一貫教育体制が整ったのである。

大学院募集要項

西棟実習室

西棟実習室

さらに、看護を巡る世の中の流れには、専門看護師（CNS）というもう一つの潮流もあり、本研究科においても平成 19 年度からクリティカルケア看護学、精神保健看護学、訪問看護学の 3 領域が CNS のカリキュラムを準備することとなった。中でも、クリティカルケア看護学は順調に入学者を得ることができ、平成 20 年度にはその教育課程が正式に認定された。一方、これまで学部で行ってきた助産師教育についても見直しを行い、平成 20 年 4 月全国の公立大学において初の大学院における高度実践者の育成を目的とした助産学領域も設置し、学部教育から継続したより高度な看護職者の教育を実践中である。

学部開設以降、大学院開設の準備とその後の管理・運営と並行して学部の教育カリキュラムの見直しも適宜実施してきた。しかし、平成 15 年度の改正は既存のカリキュラムの微修正で終わっていたことから、平成 18 年頃にはいくつかの課題が明らかになってきていた。また、看護基礎教育における看護実践能力の育成を目指した教育カリキュラムの検討が国レベルで行われていたこともあり、平成 19 年度からカリキュラム検討委員会によって、教育目標、教育内容、教育方法等の検討が行われた。その結果、看護学の科目構成、科目担当者等について、これまでの内容を大きく刷新する斬新なカリキュラムができあがり、平成 20 年度入学生より適応することとなった。

新カリキュラムでは、その教育目的及び内容から演習科目が増え、既存の施設・設備状況では対応できなくなったことから、平成 20 年度から予算要求を行った結果、平成 22 年 3 月末には病院西棟 2 階部分に実習室 2 室、教室 2 室、演習室 7 室等が整備され、これまで以上に充実した学習環境を整えることができた。

大学院講義風景

## (将来の展望)

看護学部及び看護学研究科にとっては，この 10 年間は学部開設後その教育を評価検証する間もなく，修士課程そして博士課程の準備・設置，さらに専門看護師教育課程，助産学の大学院移行など，一貫して拡大，拡充の方向で進んできた。これらの努力により，学部から大学院博士後期課程までの看護学の一環教育が行える体制が整備された。

これからの 10 年間に求められることとして，やはり教育評価が最優先課題であろう。特に，看護学部及び研究科の教育の質の検証として，これまで全く行っていない卒業生及び修了生の動向に関する追跡調査が求められる。これらの結果を基に，教育カリキュラム等の改善も当然視野に入れなければならないであろう。

さらに，学部が直面している課題として，保健師教育に関することである。これは，全国的な動きとも関係するために多面的な情報を収集しつつ，学部･大学院を含めた 9 年間教育の中で，よりよい選択ができるように慎重に検討していく必要がある。

そして，上記の課題を解決しつつ，看護学が社会，そして人々のニーズに応えるために教育・研究の側面から何が求められるのかあるいはできるのかを継続的に検討し，場合によっては新たなる研究分野の創設という選択と集中など，常に時代の変化を見据えた対応をしていきたいと考える。

大学院発表会

# システム自然科学研究科
# 自然科学研究教育センター

## 研究科長のメッセージ

システム自然科学研究科長
田島　譲二

今年は、本研究科の設立 10 周年に当たります。本研究科は、生命体を情報やシステムの観点から理解することを目標とする生体情報専攻の 1 専攻からなる研究科として平成 12 年に設立されました。

そして、この 10 年間に修士 149 名、博士 12 名を送り出してきました。研究科同窓会も、10 月に正式に発足することになっています。昨年度は、初代の研究科長である杉浦昌弘名誉教授が文化功労者に顕彰されるという嬉しい出来事がありました。

研究科に昨年度開設し、今年度から活動を本格化する“生物多様性研究センター”の名誉センター長にも就任していただきました。先生を始めとし、本研究科の得意とする遺伝子研究と地域の特性を活かした生物多様性の研究を進めていきます。夏には本研究科が中心となり、本学創立 60 周年記念事業である「生物の多様性に関する国際シンポジウム」を開催しました。先端的な研究を推進すると共に、学部の設置、地域への貢献を通じ、自然科学の基礎を身に付けた有為な若者を育成していきたいと考えています。

４号館

案内板

## 年表～この 10 年の足跡～

●**平成 12（2000）年　4月**　システム自然科学研究科（生体情報専攻）修士課程設置／初代研究科長　杉浦昌弘（現名誉教授）／２３名の入学者

●**平成 14（2002）年　4月**　システム自然科学研究科（生体情報専攻）博士課程設置／大学院研究組織：生体構造情報系、生体制御情報系、生体高次情報系、生体物質情報系の４部門からなる。

●**平成 14（2002）年12月**　国際交流協定締結（米国カンザス州ウイチタ州立大学教育学部との学術交流及び学生交流協定）

●**平成 17（2005）年　2月**　課程博士（生体情報）３名に学位授与／博士課程の完成年次／これまでに前期課程１０１名、後期課程１７名が進学する。

●**平成 17（2005）年　4月**　研究科長 森山昭彦教授就任

●**平成 19（2007）年　4月**　研究科長 田島譲二教授就任

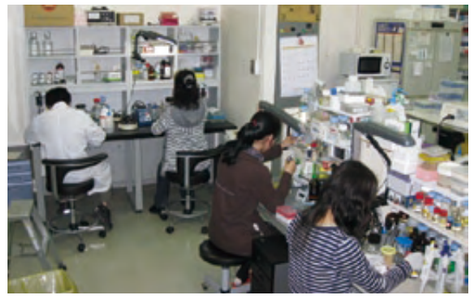


## （この 10 年の足跡と現状・将来の展望）

平成８年４月に名古屋市立大学に基礎自然科学、情報科学，健康スポーツ科学の研究組織として作られた自然科学研究教育センターに平成12年４月に大学院システム自然科学研究科（生体情報専攻）が設置された。

平成 14 年 4 月には博士後期課程が設置され 17 年度に博士号取得の学生を輩出し、研究科の完成年度を迎えた。

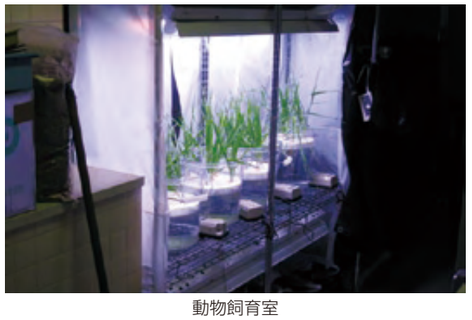
海外との学術交流（ウイチタ州立大学）も締結し、大学院の重点化（平成 14 年度から）も行なわれ、自然科学研究教育センターとして発足した組織であったが、研究教育の充実と活性化を図り、研究科将来構想委員会を設置し、現在、学部を持たない大学院から新たに学部を設置する構想、理学部環境理学科（仮）へと改革を進めている。



遺伝子研究実験（P1 共同実験室）

情報システム概論授業

平成 21 年度修士課程卒業生



動物飼育室

研究科内では、「生体微量物質の構造情報に関する測定と新たなコンピュータ解析法の構築」といった教員相互に取り組むプロジェクト研究なども試み，研究の質的向上を図ってきている。

学部を持たないために毎年オープンキャンパスの定期的な開催による入学生確保への工夫とともに社会人の受入を積極的に行ない、教育課程にも工夫を図り優秀な学生を輩出してきた。

社会貢献や地域貢献の一環とし市民公開講座に加えて大学では先駆的にサイエンスカフェ（平成 18 年６月より現在まで）を開催してきている。

平成 22 年度には、COP10 会議が名古屋で行われるが、この開催を記念して生物多様に関する国際会議や講演を主体的に行う予定である。新しい学部を有する研究科としてさらなる発展が期待されている。

# リエゾン・センター

## センター長のメッセージ

リエゾン・センター長
青山　高美

リエゾン・センターは、平成 16 年８月に設置された産学官・地域連携推進室を前身とする組織で、大学の有する資源を活用し、産学官連携及び地域連携を推進することを通じて、市民、地域社会、企業等と協働し、社会貢献を行うことを目的に、平成 18 年４月に「産学官・地域連携推進センター」として設置されました。その後、社会・地域との繋がり（フランス語で「リエゾン」）をより強化し、社会貢献を更に進めていく組織として平成 21 年４月に現在の名称に変更しています。

これからの大学は、教育・研究成果をさらに活性化するとともに、積極的に情報発信を行い、産業界、行政、地域・市民の皆様と連携し、ネットワークや活躍の場を広げていく必要があります。

本学の得意な分野である健康・福祉やバイオに加え、環境・まちづくりまで広く皆様に貢献してまいりたいと思いますので、ぜひ名古屋市立大学に気軽にお声をかけていただきますようよろしくお願いいたします。

愛知銀行との協定締結記念講演会

産学官連携推進会議

## 年表～この 10 年の足跡～

●**平成 16（2004）年　８月**　産学官・地域連携推進室設置／知的財産の大学帰属制度発足／知的財産ポリシー施行／共同研究取扱規程施行／発明取扱規程施行

●**平成 17（2005）年12月**　日本政策投資銀行との連携事業覚書の締結（平成 18 年４月の本学の公立大学法人化により、覚書締結から包括協定の締結となる。）／名古屋医工連携インキュベータ開設（運営委員会への参加）

●**平成 18（2006）年　４月**　法人化による公立大学法人名古屋市立大学への移行／産学官・地域連携推進センター設置

●**平成 18（2006）年　６月**　第1回サイエンスカフェ開催

●**平成 19（2007）年　４月**　知的財産ポリシー改定

●**平成 20（2008）年　４月**　利益相反マネジメントポリシー施行

●**平成 21（2009）年　４月**　リエゾン・センターに改称

●**平成 21（2009）年　９月**　本学最初の特許実施料収入

●**平成 21（2009）年12月**　愛知銀行との連携協定の締結

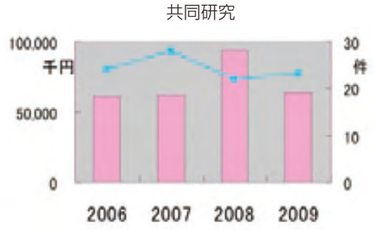
●**平成 22（2010）年　６月**　安全保障輸出管理体制整備

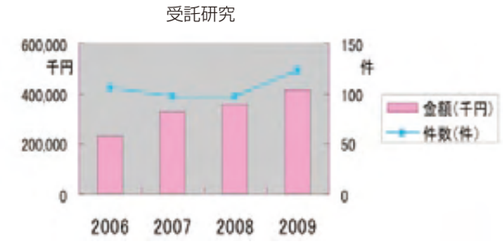


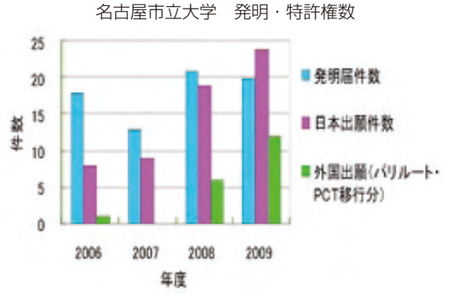
## （主な取組み）
## ～ 大学と社会・地域との リエゾン（結びつき）のために ～

リエゾン・センターでは、知的財産管理事務等を一元的に取り扱っており、知的財産ポリシーに基づいて知的財産の創出・管理・活用を行うとともに、研究室訪問・発明相談等を通じて教職員に知的財産についての意識啓発に努めているほか、研究成果の特許化等を奨励し、各種イベントの開催・参加等により、大学の研究成果・技術シーズのＰＲと活用促進を図っている。また、研究者、関係外部機関との連携を図りながら、共同研究・受託研究・学術奨励寄附金といった外部研究資金の獲得を図っているほか、市民公開講座の開催など、地域社会への貢献活動の推進を図っている。

名古屋市立大学知的財産セミナー




このほかにも、産学官連携の推進により発生する利益相反の問題に対処するため、平成 20 年４月に利益相反マネジメントポリシーを定め、利益相反に関する自己申告制度を実施するなど、利益相反マネジメント業務を行っている。また、国際的な研究活動の活発化に伴い発生する安全保障輸出管理に関する問題に対処するため、平成 22 年６月に安全保障輸出管理規程を定め、安全保障輸出管理体制を整備した。

この様なセンターの活動を全学的に推進するため、センターには、担当理事と各部局から選出された委員等からなる産学官・地域連携推進委員会が設置されている。同委員会では、毎年度の産学官・地域連携に関する事業計画や実施状況を審議しているほか、これまでに、知的財産ポリシーの改定、利益相反マネジメントポリシーの策定、安全保障輸出管理体制の整備といった案件を審議している。

このほかにも、発明委員会、地域連携・公開講座委員会、利益相反委員会といった審議機関が設置されており、それぞれ、教職員の発明の取扱い等、地域連携・公開講座の企画等、利益相反マネジメントに関する事項等について審議している。

リエゾン・センターは、以上のような取り組みを通じて産学官・地域連携を推進し、今後も、本学の資源を活用した更なる社会貢献に努めていく。

# 総合情報センター

## センター長のメッセージ

総合情報センター長
鋤柄　増根

総合情報センターは、共に情報を扱う学術情報部門 ( 図書館 ) と情報システム部門に分かれます。以前の情報システム部門は、高性能な計算機能を提供する共同利用施設でしたが、情報化とともに情報の基盤であるネットワークの運用・管理に専念する部門になりました。一方でこの情報化が資料の収集・所蔵とその検索・参照という図書館機能に劇的な変化をもたらしています。その典型は電子ジャーナルです。この電子情報は各雑誌の出版元にあり、我々はそれにアクセスしダウンロードできるという契約を結んでいるにすぎません。本学の図書館に情報は所蔵されておらず、すでに所蔵という機能はなくなったといっても過言ではありません。10 年 20 年後に図書館がどんな姿になっているか、さらには新技術によってネットワーク環境もどう変わっているかわかりません。どのような姿になっても教育・研究の基盤としての役割を変わらず果たしていきたいと考えています。

総合情報センター .

山の畑分館閲覧室

## 年表～この 10 年の足跡～

- **平成 13 (2001) 年　4月**　情報センターと図書館を統合し、「総合情報センター」に改組／初代センター長に、神山眞一教授（経済学研究科）就任
- **平成 14 (2002) 年　4月**　図書館平日の開館時間を 21 時までに延長 (山の畑、川澄分館)
- **平成 14 (2002) 年　7月**　幹線 LAN を 100Mbps に切替
- **平成 15 (2003) 年　4月**　キャンパス間の接続を 1Gbps に切替／学生証を非接触 IC カード（FeliCa）化したキャンパスカードシステムを導入
- **平成 17 (2005) 年　4月**　「Web 履修 / 電子シラバスシステム」を導入
- **平成 17 (2005) 年 10 月**　図書館において市民貸出の開始
- **平成 18 (2006) 年　4月**　センター長に鋤柄増根教授（人間文化研究科）就任／「学生ポータルシステム」導入／山の畑・川澄キャンパスに証明書自動発行機を導入
- **平成 18 (2006) 年 11 月**　My Library サービス開始
- **平成 19 (2007) 年　4月**　図書館での市民公開を平日と土曜日の全開館時間に拡大（山の畑、川澄分館）
- **平成 20 (2008) 年　3月**　SINET 接続ポイントとのネットワーク接続を 1Gbps に切替
- **平成 20 (2008) 年　4月**　川澄分館において日曜開館開始



## (この 10 年の足跡と現状・将来の展望)

平成 13 年４月に総合情報センターを設立し、情報ネットワークの整備並びに電子情報の提供を促進してきた。

**①図書館部門**

平成 14 年には山の畑分館と川澄分館において開館時間の延長（21 時まで）を図り、利用の促進に努めてきた。平成 18 年には図書館システムの更新に伴い、WEB による予約や文献取寄せの申込みなどが可能となり、利用サービスの向上を図ってきた。

図書館は、学生の学習行動に適応した学習環境の見直しを図っていく必要がある。最近の学生に見られる学習では、従来からある冊子体資料に加え電子ジャーナルなどの電子情報を同時に用いることが通常となっている。このような学習を支えるためには、図書館に情報機器によるコミュニケーションと学習を支える場・空間が必要である。この学習空間を設けることにより、大学における知あるいは情報の交流の場となることで利用者のニーズに応えていきたい。

６号館（滝子キャンパス）

川澄分館閲覧室

川澄分館入口

**②情報部門**

情報ネットワーク及びコンピュータの管理運用を主な業務としている。大学における教育や研究分野において、コンピュータ・ネットワークの利用とその整備は大学の生命線とも言える重要な課題である。平成 21 年３月の情報システムの更新時には SINET の接続ポイントとの通信速度を 1Gbps にアップするなど学内 LAN を充実させた。

今後の課題としては、教育・研究を主とする大学独自のセキュリティポリシーの確立、また学生や教職員のネットワーク使用に際してシングルサインオンの導入が挙げられる。時代とともに変遷する技術の高度化に対処し、計画的な設備の更新に努めていきたい。

# キャリア支援センター

## センター長のメッセージ

キャリア支援センター長
神山　眞一

近年の大学を取り巻く環境の変化で最も大きなものの一つに、学生の進路・就職への関心の高まりを挙げることができます。超氷河期などと言われる厳しい就職状況、やっと就職しても３年以内に約３分の１の新卒者が退職する早期離職など、若者の職業観、就業意識などが問題視され、この問題に対して積極的に取り組むことが大学に求められています。

キャリア支援センターは、平成 18 年７月に、学生の自主自立を目指し、高い志を持ち社会へ巣立つことを支援するために設置されました。キャリア支援センターの役割は、単に学生に企業などに就職するための技術を身につけさせることではなく、職業や進路に対する意識を高め、最終的には自分で職業や就職先を選ぶことができるようになることを目的としています。

学生の就職という社会との関わりを通して、社会のニーズを大学教育に反映させる役割も期待されています。

企業研究セミナー

キャリア支援センター相談風景

## 年表～この４年の足跡～

●**平成 18 (2006) 年　７月**　キャリア支援センターが開設

●**平成 19 (2007) 年　２月**　学内合同企業説明会をブース形式で初めて開催

●**平成 19 (2007) 年10 月**　インターネットを利用した求人票閲覧システム「キャリアナビ」システムを導入

インターンシップ報告会



## (この 10 年の足跡と現状・将来の展望)

従前、本学は医学・薬学・経済学という就職先が大きく異なる学部構成であったことから、就職支援は学部毎に行われてきた。また、就職活動は、求人企業等の担当者が来学し、本学の就職担当者に求人票を提出することから始まり、就職担当者が学生の希望や適性を見極めた上で、求人企業に学生を紹介する方法が中心であった。しかし、インターネットが普及するに従い就職活動の姿が大きく変化したこと、平成８年度に開設された新学部での就職活動が開始される平成 10 年度に人文社会学部に就職相談員が配置されたことから、就職支援のあり方の見直しが図られ、就職支援業務の専門化・一元化を目指すこととされた。その結果、就職相談員は学生課学生支援係の配置となり、学生会館２階の就職相談・資料室で全学の学生に就職支援を行うようになった。

現在、キャリア支援センターは、キャリア支援センター長（教育担当副学長の兼務）と、各学部・研究科より選出されたキャリア支援センター員をメンバーとするキャリア支援センター会議と、２名の相談員が常駐する相談室により構成されている。

主な業務は３年生、４年生へのガイダンス、学内での合同企業セミナー、面接対策などの個別指導といった就職活動支援、在学中に企業などでの就労経験を積むインターンシップへの支援、全学部、全学年の学生を対象とした仕事や生き方を考えるためのキャリアセミナーの開催などである。入学直後の１年生に対して、本学卒業生による充実した大学生活を送るために何が必要かというテーマについての講演は恒例行事となっている。また、薬学部及び薬学研究科、看護学部に対しても、卒業生や就職先企業等の協力を得ながら、固有のニーズに応じたキャリア形成支援を行っている。

将来的には、初年次からのキャリア形成支援の充実など、単に「就職対策」の部門としてはなく、学生が大学生活全般にわたって関わる場となることが求められている。

開設時のセンター員

OBOG 座談会

面接対策講座

キャリアセミナー　経営者と語ろう

# 国際交流推進センター

## センター長のメッセージ

国際交流推進センター長
今川　正良

我が国では学生の国際化推進策が古くから提唱され、留学生の受入れ数も海外を目指す学生も増えました。しかし、その増加傾向も頭打ちとなり、さらに他国の学生の強い海外志向とは異なって、最近の日本人学生の内向き傾向が大きな問題になっています。そのような中、本学では海外の大学との大学間交流協定締結を積極的に進めています。平成 18 年の法人化以前の締結校は 6 校でしたが、平成 22 年 3 月には 15 校に増えました。学生の交換留学や教員の交流・共同研究なども高い実績を挙げつつあります。職員の交流も始まっています。当センターでは、専任スタッフが学生のいろいろな相談に応じると共に、毎日昼休みには外国人教師がセンターを訪れ学生たちと自由に会話を楽しんでいます。開設後の日が浅く規模も十分とはいえないものの、当センターは着実に充実しつつあります。今後も、さらに国際交流の輪が広がるように、多種多様なサポートを行っていく予定です。

センター風景

Talk Time

## 年表～この 10 年の足跡～

●**平成 20（2008）年　3 月**　国際交流推進センター設置
●**平成 20（2008）年　8 月**　語学教材貸出事業・留学支援事業を開始
●**平成 20（2008）年 11 月**　事務室移転／国際交流事業を本格的に開始
●**平成 20（2008）年 12 月**　瀋陽医学院（中国）と学術交流協定を締結
●**平成 21（2009）年　3 月**　ライプツィヒ応用科学大学（ドイツ）と学術交流協定を締結
●**平成 21（2009）年　4 月**　学生と外国人教師の交流事業「Talk Time」を開始
●**平成 21（2009）年　5 月**　浙江大学管理学院（中国）と学術交流協定を締結
●**平成 21（2009）年 11 月**　「留学・海外体験フェア」を開催
●**平成 22（2010）年　3 月**　マレーシア国民大学（マレーシア）と学術交流協定を締結／ベトナム国立大学ホーチミン校（ベトナム）と学術交流協定を締結



## （国際交流の架け橋を目指して）

国際交流推進センターは、国際感覚豊かな人材の育成を目指して学生の交流を促進するとともに、国際的共同研究や支援活動の推進により地域の国際化への貢献を果たすため、平成 20 年 3 月に開設された。

海外の大学や研究機関との交流を推進するため、教員の海外派遣や海外からの研究者の受け入れを行うほか、海外の大学等との学術交流協定の締結を促進している。また様々な期間・内容の留学プログラムを実施し、学生の海外派遣も積極的に行っている。

そのほか、海外への留学を希望する学生をサポートするため滝子キャンパス 1 号館に「国際交流推進センター」を設置し、次のような取り組みを行っている。

南カリフォルニア大学（USC）

瀋陽薬科大学

ニューサウスウェールズ大学（UNSW）

パリ第 13 大学

●専任スタッフによる留学相談
●留学体験者による報告会
●語学教材の貸出し
●留学資料の閲覧
● TOEFL iBT 模擬試験の実施
●外国人教師と英語によるフリートークができる機会として「Talk Time」の実施
●留学生との交流会等の実施

今後も国際交流推進センターでは、学生の留学支援のための事業を充実させるとともに、海外の大学との交流をさらに推進するため、学術交流協定の締結を積極的に進めていく。

# 医学部附属病院
# ( 市立大学病院 )

## 病院長のメッセージ

病院長
山田　和雄

市立大学病院は、名古屋市立大学が発足した昭和 25 年に医学部の附属病院として位置づけられ、以来、60 年にわたって医学教育及び研究の進歩に貢献するとともに、地域の中核医療機関として、高度かつ安全で開かれた医療を提供してまいりました。

大学病院の施設は今から 7 年前に病棟・中央診療棟が開院し、その 3 年後には外来診療棟も完成し全ての施設が新しくなり、世界に誇れる大学病院となりました。同時に施設面だけでなく、機能的な発展も心がけ、特定機能病院としての充実を図るとともに、地域がん診療連携拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院、日本医療機能評価機構認定病院など大学病院として無くてはならない機能を取得してまいりました。

特に、この 10 年の動きとして病院の最大のイベントは病院の改築であったわけですが、大幅な設計の見直しを図るなど紆余曲折の中で完成した新病院は、職員や関係者の努力の賜であり感慨もひとしおでした。また開院にあたっては新病院への患者さんの移動や物品の移転など十分な計画と度々のリハーサルで全職員が一致協力し事故なく大移動できたことも大きな感動でした。丁度、私も新病院の機能の要となる最先端の電子カルテの導入責任者であり、リハーサルを繰り返し何度も確認しながら祈る思いで移転の日を迎えた思い出があります。

平成 18 年度には独立行政法人化を迎え、病院はより一層の自主自立性を求められてきたところですが、今日では各診療科においてアメニティの向上と心温まる対応を心がけ、多くの患者さんからご支持をいただいております。特に診療面では、医師、看護師、薬剤師、コメディカル、事務部門が共同して患者さんの治療とケアに心がけ、病院全体でチーム医療を実践しており、また、最近ではがんの総合的診療、緩和医療、ＮＳＴ ( 栄養サポートチーム )、新生児医療 (NICU)、重症患者治療 (ICU・CCU)、総合的リハビリテーションなど、チーム医療が力を発揮しております。さらにこれらのチーム医療を推進するため、電子カルテが医療の高度化と医療の安全確保に大きく貢献しているところです。

近年話題となっている全国的な医師不足は、大学病院としての課題でもあるのですが、大学病院の独自性を発揮して魅力ある病院となるように活性化を図るとともに、質の高い医療人の育成を図ってまいります。

市立大学病院では、「患者さんの笑顔と感動にあふれる病院を目指して」をビジョンに市民の皆様に最高の医療サービスを提供するとともに、信頼のもと安心して受診できる大学病院として一層の研鑽を重ねてまいります。

今後とも皆様方のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



## 年表～この 10 年の足跡～

●**平成 15（2003）年　4 月**　内科再々編　計 27 診療科 ( 循環器内科、血液・化学療法内科、膠原病内科、心療内科を肝・膵臓内科、循環器・心療内科、血液・化学療法内科に再編 ) ／臨床研修センター、医療・福祉地域連携室、医療安全管理室、病床管理センターを設置

●**平成 15（2003）年 11 月**　病棟・中央診療棟完成記念式典

●**平成 16（2004）年　1 月**　病棟・中央診療棟開院

●**平成 16（2004）年　4 月**　臨床遺伝医療部、物品供給センター、経営・情報企画部、管理部業務課を設置

●**平成 17（2005）年　3 月**　第 2 期工事着工 ( 外来診療棟建設 )

●**平成 18（2006）年　4 月**　臨床試験管理センター設置

●**平成 19（2007）年　3 月**　外来診療棟完成記念式典／災害拠点病院に指定

●**平成 19（2007）年　4 月**　分べん成育先端医療センター、化学療法部設置

●**平成 19（2007）年　5 月**　外来診療棟開院

●**平成 19（2007）年　6 月**　7 対 1 看護を実施

●**平成 20（2008）年　2 月**　病院機能評価 (Ver5.0) を取得／地域がん診療連携拠点病院に指定

●**平成 20（2008）年　4 月**　第 3 期工事着工 ( 外構及び駐車場等整備 ) ／肝疾患診療連携拠点病院に指定／診療情報管理室設置

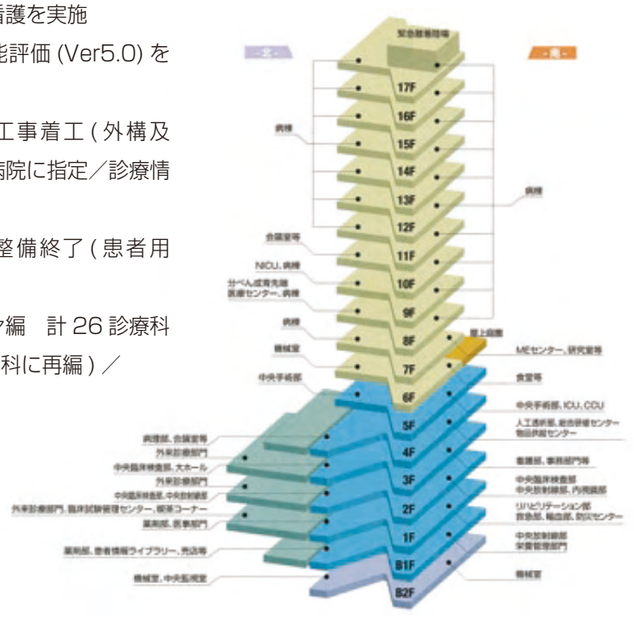
●**平成 21（2009）年　3 月**　駐車場整備終了 ( 患者用 350 台 )

●**平成 21（2009）年　4 月**　外科再々編　計 26 診療科 ( 消化器外科、一般外科を消化器・一般外科に再編 ) ／腫瘍センター、緩和ケア部、肝疾患診療室、感染制御室、診療情報管理部、戦略企画室を設置

●**平成 22（2010）年　4 月**
臨床栄養管理室を設置

市立大学病院（昭和 56 年頃）

市立大学病院（平成 22 年）



## (この 10 年の足跡と現状・将来の展望)

【足跡】

この 10 年は、まさに改築の歩みであり、平成 15 年に病棟・中央診療棟が完成し、その後第２期工事に入り、平成 19 年には外来診療棟が開院、引き続き駐車場等の整備に取り掛かり、平成 21 年の３月にすべての工事を終えることができた。

平成３年４月から検討が始められた「病院改築基本計画」も 19 年の時を経て、ようやく完成するに至った。

私たちの夢と期待の集大成である新病院が、ようやく形となったのである。

病棟・中央診療棟　建築風景

完成後の市立大学病院

【現在】

現在の市立大学病院は、高度医療機能を有する名古屋医療圏の中核医療機関として市民の皆様に最高の医療サービスを提供するとともに、安心して受診できる病院としてその役目を果たしている。高度医療の提供はもとより、地域がん診療連携拠点病院や肝疾患診療連携拠点病院として指定を受けるとともに、病院機能評価を取得するなど、職員一人一人が、患者さんのために精一杯努力しているところである。

一方、大学病院として様々な職種の医療人の育成にも力を入れている。

【将来の展望】

医療を取り巻く環境の変化に柔軟かつ迅速に対応できる組織を構築するとともに、「調和の中での選択と集中」を進め、この地域の診療の中心としての役割を果たすため、特色を持った病院としていく必要がある。そのためには、病院が対外的競争力を身に付けることと併せて、職員のモチベーションの維持・向上に努める必要があると考えている。

上空から病院建物を望む



## (新病院の特徴について)

### １　医療の高度化への対応

地域の高度先進医療機関としての機能をより一層充実させるため、数々の高度医療機器を整備するとともに、第３次救急患者の受け入れ態勢の充実強化を図った。

外来診療棟には、化学療法をより安全かつ快適に受けていただくことができるように、外来化学療法室を設置した。

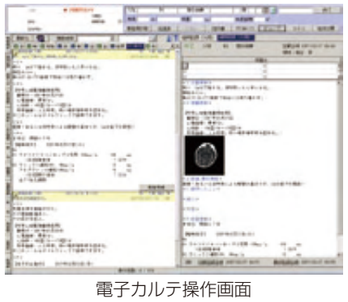
外来化学療法室

### ２　患者アメニティの向上

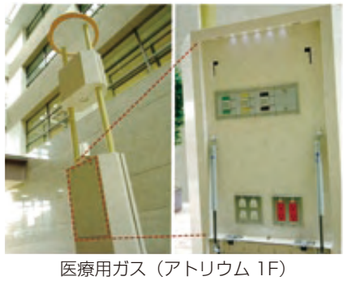
患者さんのプライバシー保護に配慮し、外来診療棟の診察室を個室化するとともに、病棟においても個室を増やした。病気についての情報などを患者さんがご自身で調べたりできるように、患者情報ライブラリーを設置した。

また、屋上庭園や吹き抜けのアトリウムを設置するなど、明るい空間を創出し、患者さんに快適に過ごしていただけるように配慮した。

患者情報ライブラリー



電子カルテ操作画面



医療用ガス（アトリウム 1F）

### ３　病院情報システムの充実

当院では、診療記録や病状の推移等に関する診療情報のすべてを電子記録化し、それらを一元管理することにより、医療スタッフが必要な情報を必要な時に利用できる電子カルテシステムが導入されている。

また、外来診療棟に診察状況を知らせる表示パネルを設置し、待ち時間をわかりやすくした。

### ４　震災対策の充実

地震対策として耐震壁・制震壁を採用するなど、建物構造の強化を図った。

災害拠点病院としての機能を充実させるため、病棟・中央診療棟に３日間対応可能な大型貯水槽や非常用自家発電機を設置し、屋上にはヘリコプターの緊急離着陸場を設置した。また、外来診療棟のアトリウムにも医療用ガスを設置した。

## 名誉教授一覧

| 氏名 | 名誉授与日 |
|---|---|
| 戸谷銀三郎 | 昭和32年 4月 2日 |
| 吉田 義治 | 33年 4月 1日 |
| 中西 栄作 | 36年 4月 1日 |
| 織田 敬信 | 36年 4月 1日 |
| 松田 豪一 | 38年 4月 1日 |
| 内藤多喜夫 | 38年 4月 1日 |
| 木村 廉 | 38年12月23日 |
| 安田清次郎 | 40年 4月 1日 |
| 明石 修三 | 41年 4月 1日 |
| 藤浪 修一 | 42年 4月 1日 |
| 齋藤 宏 | 42年 4月 1日 |
| 伊賀 征央 | 43年 4月 1日 |
| 岸本 鎌一 | 44年 4月 1日 |
| 森 堅志 | 44年 4月 1日 |
| 石坂 音治 | 44年 4月 1日 |
| 一谷藤一郎 | 44年 4月 1日 |
| 中西 正雄 | 44年 4月 1日 |
| 新田 初雄 | 45年 4月 1日 |
| 上田 文男 | 45年 4月 1日 |
| 稲田 五郎 | 45年 4月 1日 |
| 靜田 均 | 45年 4月 1日 |
| 田中 宏 | 45年 4月 1日 |
| 小川 透 | 46年 4月 1日 |
| 渡邉金三郎 | 46年 4月 1日 |
| 平田 隆夫 | 46年 4月 1日 |
| 萩野鉚太郎 | 46年12月13日 |
| 佐藤 壽昌 | 48年 4月 1日 |
| 稲垣 勲 | 48年 4月 1日 |
| 山本安次郎 | 48年 4月 1日 |
| 高松 好文 | 48年 4月 1日 |
| 木村 俊一 | 48年 4月 1日 |
| 岸川 基明 | 49年 4月 1日 |
| 塚本長太郎 | 49年 4月 1日 |
| 六鹿 鶴雄 | 50年 4月 1日 |
| 高須 照男 | 50年 4月 1日 |
| 安江 政一 | 50年 4月 1日 |
| 柴田多賀治 | 50年 4月 1日 |
| 齋藤 信 | 50年 4月 1日 |
| 小川 次郎 | 51年 4月 1日 |
| 岡 直友 | 51年 4月 1日 |
| 寺田 正道 | 51年 4月 1日 |
| 栗林 角三 | 51年 4月 1日 |
| 白井 秀明 | 52年 4月 1日 |
| 小川 正亮 | 52年 4月 1日 |
| 柴田 清人 | 53年 4月 1日 |
| 滝川 清治 | 53年 4月 1日 |
| 鈴木 尚彦 | 53年 4月 1日 |
| 久田 四郎 | 54年 4月 1日 |
| 永井 良治 | 54年 4月 1日 |
| 水谷 彰 | 54年 4月 1日 |
| 村瀬 俊一 | 54年 4月 1日 |
| 高木健太郎 | 55年 2月29日 |
| 伊藤 磯雄 | 56年 4月 1日 |
| 柴田 裕 | 56年 4月 1日 |
| 植松 平馬 | 57年 4月 1日 |
| 奥谷 博俊 | 58年 4月 1日 |
| 鈴置 善吉 | 58年 4月 1日 |
| 山崎 章甫 | 58年 4月 1日 |
| 蜂須賀養悦 | 61年 4月 1日 |
| 松井 哲夫 | 62年 4月 1日 |
| 岸本 英正 | 63年 4月 1日 |
| 堀田 健 | 63年 4月 1日 |
| 水野 信行 | 平成 1年 4月 1日 |

| 氏名 | 名誉授与日 |
|---|---|
| 喜谷 喜徳 | 平成 1年 4月 1日 |
| 手島 節三 | 1年 4月 1日 |
| 青地 修 | 2年 4月 1日 |
| 青山 光子 | 3年 4月 1日 |
| 山田 達也 | 3年 4月 1日 |
| 高部福太郎 | 4年 4月 1日 |
| 渡 仲三 | 4年 4月 1日 |
| 佐藤 重房 | 4年 4月 1日 |
| 池田 憲 | 4年 4月 1日 |
| 岸本 博 | 4年 4月 1日 |
| 牛嶋 正 | 4年 4月 1日 |
| 妙見 孟 | 4年 4月 1日 |
| 堀 襄二 | 4年 4月 1日 |
| 小島 誠 | 4年 4月 1日 |
| 由良 二郎 | 5年 4月 1日 |
| 山本 正彦 | 5年 4月 1日 |
| 木村 吉男 | 5年 4月 1日 |
| 田中 道夫 | 5年 4月 1日 |
| 加藤 昭二 | 5年 4月 1日 |
| 生田 博之 | 5年 4月 1日 |
| 舌津 清 | 5年 4月 1日 |
| 田中 亮 | 6年 4月 1日 |
| 永井 肇 | 6年 4月 1日 |
| 松永 嘉夫 | 6年 4月 1日 |
| 石原 宏 | 6年 4月 1日 |
| 義井 博 | 6年 4月 1日 |
| 岩橋 亮輔 | 7年 4月 1日 |
| 林 秀之 | 7年 4月 1日 |
| 藤井 隆 | 7年 4月 1日 |
| 正岡 昭 | 8年 4月 1日 |
| 八神 喜昭 | 8年 4月 1日 |
| 武内 俊彦 | 8年 4月 1日 |
| 馬嶋 昭生 | 9年 4月 1日 |
| 山田 和順 | 9年 4月 1日 |
| 榊原 仁作 | 9年 4月 1日 |
| 藤浪 隆夫 | 10年 4月 1日 |
| 馬場 駿吉 | 10年 4月 1日 |
| 川添 豊 | 10年 4月 1日 |
| 上村 政彦 | 10年 4月 1日 |
| 猪狩 盛夫 | 10年 4月 1日 |
| 柴田 偉雄 | 11年 4月 1日 |
| 濱中 淑彦 | 11年 4月 1日 |
| 佐藤 義朗 | 11年 4月 1日 |
| 池澤 宏郎 | 11年 4月 1日 |
| 酒井 朝也 | 11年 4月 1日 |
| 宮川 淳 | 11年 4月 1日 |
| 伊東 信行 | 12年 4月 1日 |
| 佐々木 實 | 12年 4月 1日 |
| 渡邉 稔 | 12年 4月 1日 |
| 渡邉 淳 | 12年 4月 1日 |
| 根津 永二 | 12年 4月 1日 |
| 城戸 毅 | 12年 4月 1日 |
| 水野金一郎 | 12年 4月 1日 |
| 大場 覚 | 13年 4月 1日 |
| 塩入 孝之 | 13年 4月 1日 |
| 粂 幸男 | 13年 4月 1日 |
| 柳澤 忠 | 13年 4月 1日 |
| 石原 英子 | 13年 4月 1日 |
| 山本 正康 | 13年 4月 1日 |
| 松井 宣夫 | 14年 4月 1日 |
| 荻原 幸夫 | 14年 4月 1日 |
| 安川 悦子 | 14年 4月 1日 |
| 山下 享子 | 14年 4月 1日 |

| 氏名 | 名誉授与日 |
|---|---|
| 岡田 秀親 | 平成15年 4月 1日 |
| 辻 卓夫 | 15年 4月 1日 |
| 四ツ柳智久 | 15年 4月 1日 |
| 國村 道雄 | 15年 4月 1日 |
| 太田 悦生 | 15年 4月 1日 |
| 森 正 | 15年 4月 1日 |
| 宮村 篤典 | 15年 4月 1日 |
| 磯本 征雄 | 15年 4月 1日 |
| 杤久保邦夫 | 16年 4月 1日 |
| 西田 耕三 | 16年 4月 1日 |
| 服部 右子 | 16年 4月 1日 |
| 久田 絢子 | 16年 4月 1日 |
| 奥山 健二 | 16年 4月 1日 |
| 山本 眞輔 | 16年 4月 1日 |
| 千手 博文 | 16年 4月 1日 |
| 御供 泰治 | 16年 4月 1日 |
| 伊藤 誠 | 17年 4月 1日 |
| 鈴森 薫 | 17年 4月 1日 |
| 奥山 治美 | 17年 4月 1日 |
| 島根 國士 | 17年 4月 1日 |
| 杉浦 昌弘 | 17年 4月 1日 |
| 奥戸 雄二 | 17年 4月 1日 |
| 中西 守 | 18年 4月 1日 |
| 安藤 金男 | 18年 4月 1日 |
| 塩見 治人 | 18年 4月 1日 |
| 新美 康隆 | 18年 4月 1日 |
| 稲垣 勝彦 | 18年 4月 1日 |
| 川﨑 和男 | 18年 4月 1日 |
| 福本 理 | 18年 4月 1日 |
| 真辺 忠夫 | 19年 4月 1日 |
| 勝屋 弘忠 | 19年 4月 1日 |
| 加藤いつみ | 19年 4月 1日 |
| 堀江 祥允 | 19年 4月 1日 |
| 村井 忠政 | 19年 4月 1日 |
| 成田 興史 | 19年 4月 1日 |
| 廣川 美子 | 19年 4月 1日 |
| 曽爾 彊 | 20年 4月 1日 |
| 栄本 忠昭 | 20年 4月 1日 |
| 水谷 隆治 | 20年 4月 1日 |
| 内藤 能房 | 20年 4月 1日 |
| 安田 秀雄 | 20年 4月 1日 |
| 清水 興安 | 20年 4月 1日 |
| 髙橋 禮子 | 20年 4月 1日 |
| 中島 捷久 | 21年 4月 1日 |
| 津田 洋幸 | 21年 4月 1日 |
| 米勢 政勝 | 21年 4月 1日 |
| 福吉 勝男 | 21年 4月 1日 |
| 穐丸 武臣 | 21年 4月 1日 |
| 森 哲彦 | 21年 4月 1日 |
| 森島 紘 | 21年 4月 1日 |
| 谷本 英一 | 21年 4月 1日 |
| 橋本 佳明 | 21年 4月 1日 |
| 舘脇 洋 | 21年 4月 1日 |
| 竹谷 英子 | 21年 4月 1日 |
| 西野 仁雄 | 22年 4月 1日 |
| 上田 龍三 | 22年 4月 1日 |
| 鈴木 光 | 22年 4月 1日 |
| 青山 豊彦 | 22年 4月 1日 |
| 小田嶋和徳 | 22年 4月 1日 |
| 宮原 孝夫 | 22年 4月 1日 |
| 後藤 宗理 | 22年 4月 1日 |
| 中村 昭雄 | 22年 4月 1日 |



# 同窓会・後援会・学友会 〜60周年によせて〜

同窓会・後援会・学友会の原稿執筆に至っては平成22年3月1日現在会長職であった方にお願いしております。なお、平成22年10月28日現在で、瑞友会（医学部同窓会）は奥村恪郎会長、看護学部同窓会は岡嶋良枝会長、ひさぎ会（名古屋女子専門学校・名古屋市立女子短期大学同窓会）は角田茉瑳子会長、学友会は山田未沙稀会長が就任しております。

# 開学 60 周年を迎えて

名古屋市立大学医学部同窓会　瑞友会　会長　花井謙次

桜の季節も終わり初夏を迎える今日この頃ですが皆様にはつつがなくお過ごしのことと拝察いたします。この度は開学 60 周年を迎えるにあたり一言述べさせていただきます。

名古屋市立大学は昭和１８年４月に開設された名古屋市立女子高等医学専門学校がその起源であります。昭和 22 年には名古屋女子医科大学となり、昭和 25 年に医学部と薬学部が統合し名古屋市立大学となったのです。本学は名古屋市立大学になって本年で 60 年が経つことになります。

まず今、名古屋市博物館となっている場所で名古屋市立大学病院（旧市民病院）を開設し診療が開始されました。そして昭和 41 年に川澄地区の新病院に移転し診療を行うことになりました。その間には本当にいろいろな事がありました。

私自身いちばん記憶に残っているのは伊勢湾台風の時の事です。私は医学部のいわゆる M １つまり３年生でしたが、昭和 34 年９月 26 日夜半よりものすごい雨と風が東海地方を襲いました。名古屋市の港区、中川区の家屋はすべて水に浸かりました。同級生のいた南陽町から蟹江町にかけてが最も浸水量が多く、すべての家が２階まで水に浸かったとのことです。翌日大学に出ていくと医学部の上級生の方は診療のお手伝いを、我々下級生は南区、港区でお亡くなりなった方の納棺の手伝いをして欲しいとのことになりました。２週間そのことを同級生一同でさせていただきました。

皆様も御承知のように私共の名古屋市立大学医学部同窓会は平成 19 年４月より新しい組織、瑞友会に生まれ変わりました。それ以後約２年が経過しましたが順調に推移しているものと考えます。

総会員数は平成２１年の時点で 4,443 名で正会員の方が 3,998 名であります。そのうち他大学出身の方で瑞友会に入会していただいた方は 183 名であります。正会員のほかに名誉会員 31 名がおられ、学生会員も 495 名みえます。今後さらに多くの他大学出身の先生方に入会していただきたいと期待いたしております。

今後、名古屋市立大学がさらなる発展をされることを期待いたします。

厚生会館

厚生会館（同窓会館）会議室

# 開学 60 周年を迎えて

名古屋市立大学薬学部同窓会　薬友会　会長　榊原仁作

名古屋市立大学薬友会は、明治 17 年６月創立の名古屋薬学校から、愛知薬学校、愛知高等薬学校、名古屋薬学専門学校、名古屋市立名古屋薬学専門学校、昭和 24 年に名古屋薬科大学となり、昭和 25 年４月に名古屋市立大学薬学部と発展してきた百二十数年の歴史の中で卒業してこられた同窓生を会員としています。会員には専攻科、大学院修士及び博士課程修了生、そして研究員の方々にも参加していただいています。薬友会の名称は東京大学、京都大学の薬学部の同窓会の名称に倣って昭和 37 年に改称されたものです。

第一代横井亀吉会長、第二代横井北海雄会長、第三代水野民也会長の後を受けて現在、榊原仁作が第四代会長を務めています。昭和 59 年には創立 100 周年を記念して会員のご寄付により記念式典、講演会等を開催すると共に、薬友会館を建設し、120 周年記念としては薬学部の歴史を刻んだ記念碑と薬友会館の整備を、また、平成３年には名古屋薬学専門学校の校舎跡地、現在の滝の水公園にその地で学ばれた時代の卒業生及び有志の人により、ベンゼン環と天秤を組み合わせたデザインの記念碑を設置しました。

薬友会館には水野前名誉会長の肝いりで、名古屋茶道の松尾家元のお茶席を模して茶室を設置し、薬炉庵と命名して学生さんや同窓生の憩いの場所となっています。薬友会館の周囲にはやはり卒業生の寄付によるきれいな椿樹が二十数年の年月を経て毎年素晴らしい花を咲かせています。２階には畳の大広間を用意して主に学生さんに集いの場所を提供し、また先生方の憩いの場としての職員談話室を設置しました。３階の大講義室は水野前名誉会長のご意思による卒業生の研鑽の場所として、水野ホールの名称で活用されています。

薬友会では、毎年３月から翌年２月の年度で活動し、３月には全会員に会報を届け、４月の第一日曜にその年度の方針を決める役員会、４月の第三 ( 又は第四 ) 土曜に代議員会・総会を開催しています。会の運営には年間数回の理事会を開いていろいろな問題解決に当たっています。毎年積み立てています特別会計の利息で事務職員をと考えていたのですが、昨今の利息状況ではその望みがなく、研究・教育の本務でお忙しい理事の方々のボランティア精神に頼らざるを得ないのを心苦しく思っています。

名古屋での総会のほかに、関東支部総会 ( 東京 )、関西支部総会 ( 大阪 )、三重支部総会、長野支部総会、新潟支部総会、台湾支部総会など各支部の総会も活発に開催され、各支部総会には懐かしい先生方もご出席下さっていて、同窓生の親睦と研修に努められています。

薬友会は、毎年秋に卒後教育講座を継続して開催し、他大学卒業生の参加も多く、多数の受講者が熱心に勉強しておられます。今後実務実習などを通して社会で活躍中の卒業生にも大学訪問の機会を増やしていただき、勉強、討論などの便宜を提供してゆきたいと考えています。また、静岡・岐阜の公立薬科大学の協力を得ての名市大薬学部主催の「学びなおしの教育」プログラムに協力、支援し、その発展に助力できればと考えています。

４月の第一日曜の午後には、医学同窓会・瑞友会、経済学部同窓会・瑞山会などと共催で花見・お茶の会を開いています。お茶室を利用しての茶道・華道の練習などや、瑞山会主催のバーベキュー大会への出席や、各学部同窓会の総会にお互いの役員を派遣するなどして絆を深めています。

# 開学 60 周年を迎えて

経済学部同窓会　瑞山会　会長　前田勝昭

名古屋市立大学が開学 60 周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

名古屋市立大学経済学部は、昭和 43 年 3 月に第一期生が卒業いたしました。我が瑞山会は、その 10 年後にあたる昭和 53 年 11 月に、第一期生が発起人となり、卒業生有志の熱意と努力により設立されました。爾来、毎年 200 名あまりの会員を加え、今日ではその会員数は 8,000 名に達し、一大組織として存立しております。

瑞山会は、会員相互の親睦を図るとともに、母校の発展に寄与することを目的としております。またその目的を達成するために、

・バーベキュー大会、ゴルフコンペ、山崎川花見茶会など親睦会の開催

・親睦会の開催や大学の近況報告等、瑞山会会報の年一回発行

・4 年に一度、会員名簿の発行

等、様々な事業を企画・運営し、会員皆様にご協力をいただいております。

また、身近な会員相互の交流の場を広げ、且つ一層親睦を深めることを目的とした、地域別、職種別等支部活動も進めております。

その他、経済学部の新卒業生を対象に、成績優秀者を表彰しております。毎年、卒業論文に秀でた者、社会貢献活動に秀でた者計 5 名に対し、卒業謝恩会にて表彰し、「瑞山会賞」を授与しております。

平成 20 年には瑞山会創立 30 周年を迎え、9 月に記念総会並びに特別記念講演会を開催いたしました。講師を招いての特別記念講演会では、瑞山会会員の他、広く一般聴衆者の聴講も募り、300 名近い方のご参加をいただき、大変ご好評をいただきました。

我々瑞山会会員も皆様と共に、歴史と伝統ある名古屋市立大学の一員としての誇りと一層の気概を持ってさらなる前進をして参りたいと思っております。どうか今後とも皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、名古屋市立大学のますますのご発展と、皆様の一層のご繁栄を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

瑞山会創立 30 周年記念総会 平成 21 年 9 月 14 日名古屋観光ホテル

# 開学60周年、経済学研究科40周年を祝す

経済学研究科同窓会　剣陵会　会長　梅原浩次郎

経済学研究科は、昭和 43 年度に博士前期課程が設置されました。夜間開講の社会人大学院の開設は平成元年度であります。平成 17 年度には、社会人大学院に博士後期課程が設置され、働きながら課程博士を取得できる道が開かれました。経済学研究科創設からはすでに 40 年余が過ぎています。社会人大学院からは、20 回目となる修了生が送り出されています。開学 60 周年行事に先駆けて、さる 3 月、経済学研究科創設 40 周年・社会人大学院創設 20 周年記念式典を盛大に執り行いました。

同窓会・剣陵会は、当初社会人大学院修了生によって組織されました。その後、研究科修了生を包括的に組織する同窓会として発展改組を行ってきたところであります。今や、経済学研究科同窓会として本格展開をする時期を迎えたのではないかと考えています。修士の学位取得者は合計で 600 名近い人数となっています。中国留学生の方々の人数も顕著に増加し、中国支部を作ろうではないかというのも最近の話題であります。

剣陵会は、大学院の同窓会に相応しい事業を行おうと、市民公開講座、大学院寄付講義、中国社会科学院との学術交流、著作『トヨタショックと愛知の経済社会』出版へ向けての活動に取組んできました。例えば、寄付講義では、同窓会が大学院に協力して経済学特論、経営学特論を開講することにしました。研究成果や社会経験を大学院の教育・研究に還元し、自己の研鑽に役立てています。しかも一過性ではなく継続的に引き受けていくことにしています。平成 21 年度は「地域開発及び自動車産業論」「企業経営における今日的課題」、平成 22 年度は「税財政改革と社会制度改革」「企業戦略と日本企業」をテーマとしています。

研究活動を通じて「人生を変えた」経験をしている会員が多いと聞きます。大学院と同窓会が、会員の研究活動の拠点となるように、さらに高みをめざして努力をしたいと考えています。

名古屋市立大学と経済学研究科の益々の発展を祈念しています。

日中学術交流・懇親会
（大学院教授・中国社会科学院教授を囲んで）

経済学研究科 40 周年、社会人大学院 20 周年を
記念するあゆみ（平成 22 年 3 月刊行）

# 名古屋市立大学開学６０周年に寄せて

人文社会学部同窓会　会長　野村圭一

名古屋市立大学開学６０周年おめでとうございます。名古屋市立大学は、昭和２５年に医学部と薬学部の２学部で発足しました。以来６０年が経ち、現在は６学部・７研究科をもつ総合大学となり、今年、開学６０周年と人間にたとえれば還暦を迎えることになります。

平成 ８年には、名古屋市立女子短期大学、名古屋市立保育短期大学、名古屋市立大学教養部の三者が統合、改組されて、新しく人文社会学部が誕生しました。人文社会学部には、人間科学科、現代社会学科、国際文化学科が設置されています。以来、現在に至るまでの間、卒業生数は１，５００名を超す数となりました。私たち人文社会学部同窓会も他学部の同窓会と連携しながら、卒業生のため、学生のため、そして大学の発展に寄与するために、さらに努力する必要があります。

私たちは、人文社会学部及び（大学院）人間文化研究科での教育を通じて、豊かで人間らしい生き方（well-being）と持続可能な地域社会・地球社会を創造していく担い手となることを期待され、大学から社会へと送り出されました。私たち人文社会学部同窓生は、変化の激しい社会に追随するだけでなく、自らの思いと行動によって社会を変える、という自覚を持ち、過去から現在そして未来を広い視野で見通して、自らが大学で学んできた理想や信念に従い、社会からの期待に応え続けることのできる人間でありたいと考えます。

最後になりましたが、開学６０周年という節目を迎え、市民及び社会に開かれた大学づくりを目指して、新たな第一歩を踏み出そうとしている名古屋市立大学に対しまして、各界でご活躍の卒業生の皆様には、今後とも暖かいご支援・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

１号館（人文社会学部棟）

# 専門性を持つ社会人を多角的につなぐ場に

芸術工学部同窓会　萱光会　会長　丸山勝也

大学開学 60 周年の節目の年、芸術工学部は学部開設 15 年目を迎えます。平成８年の学部開設当初、芸術工学という新しい学問分野を形成しようと先生方も学生も奮闘していたことが、つい先日のように思い出されます。設備や制度には未整備なところもありましたが、学部草創期のエネルギーに満ちていたように思います。今日では大学院も開設され、イタリアのトリノ工科大学への留学制度や、学年学科を越えた「卓」プロジェクトなどもでき、研究教育機関としての充実度が増しています。

芸術工学部同窓会「萱光会」は平成 13 年に発足し、折しも設立 10 年目の区切りの年となります。他学部の同窓会に比べれば、歴史も浅く規模も小さいですが、少しずつ体制を整え、これまでに会報の発行や総会の開催のほか、活動助成制度の整備、Web サイトの開設、卒業生の仕事を紹介する企画などを行ってきました。そうした活動を通して、卒業生の活躍の声を耳にすることも徐々に増えてきています。

卒業生の活動分野はグラフィックやプロダクト、平面・立体造形、映像、サウンド、建築、アーバンなど幅広く、中には芸人や海外で活動する人もいます。職種も業種も実に多彩ですが、共通しているのは企画力、提案力の高さであります。それは芸術工学が狭義のデザインではなく、広い視野に立ちながら、社会の様々な問題に対しモノやコトを通した具体的な提案をしていくものだということを示しているのかもしれません。

萱光会では今後、地元や他学部との連携をより積極的に強めながら、大学及び地域の発展に微力ながら寄与していけたらと思います。専門性を持った社会人が多角的につながる場として、大学や同窓会が機能していければ、個人にとっても組織や地域にとっても大きな力になるのではないでしょうか。

萱光会
名古屋市立大学芸術工学部同窓会

平成 10 年の芸工棟オープンハウス

萱光会 Web サイト トップページ

# 名古屋市立大学看護学部同窓会に至るまでのあゆみ

看護学部同窓会　会長　田中道子

名古屋市立大学看護学部同窓会に至るまでのあゆみは、戦後の新看護教育制度により創設された名古屋女子医科大学附属高等厚生女学校（後、名古屋市立大学看護学校と改める）の第１期生（昭和 27 年３月卒業）のクラス会から始まります。昭和 40 年３月第 14 期生の卒業を機会として同窓会整備の目的で発起人 ( 代表　田中道子、井田節子、山田重子、石川八千代、松林貞子、清水ひろ子 ) により総会を開催、同窓会誌創刊号が発行されました。そして名古屋市立大学看護短期大学部同窓会誌第 1 号まで続いた後、同窓会誌を名簿に変更・発行されています。

名古屋市立大学看護短期大学部同窓会は平成 11 年４月名古屋市立大学看護学部開学以来、看護学部と同一の同窓会となることを希望し、両同窓会の代表による話し合いが重ねられ、その機が熟した平成 19 年 10 月８日をもって看護学部と合併し、名称は「名古屋市立大学看護学部同窓会」となりました。同年、同窓会合併記念誌が発行されました。平成 22 年３月現在、この同窓会の総会員数は、名古屋市立大学看護学校卒業生 1,018 名、名古屋市立大学看護短期大学部卒業生 1,068 名、名古屋市立大学看護学部卒業生 537 名及び同看護学部学生会員 326 名の合計 2,949 名であります。

本同窓会は「会員相互の親睦を図り、看護の向上と発展に寄与する」ことを目的に総会、親睦会及び名簿発行等の事業が円滑に運営されています。

平成 20 年度　名古屋市立大学看護学部同窓会懇親会

# 名古屋市立大学開学 60 周年を祝して

システム自然科学研究科同窓会　会長　佐々木忠将

名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科は、平成 12 年に「生命科学」と「情報科学」を核として自然科学の諸分野を融合した新しい学問領域を創造することを目指して設立された学部を持たない研究科です。そのため、文・理を問わず様々なバックグラウンドを持つ学生が集い、従来の学科や専攻などの縦型組織の枠を超えた独創的な研究成果を世に問い、世界の発展に貢献する創造性豊かな人材を社会に送り出し発展を続けています。こうした歩みの中で、創立５周年を迎えた平成 17 年３月に、システム自然科学研究科同窓会の前身ともいえる有志の会が発足し、細々と活動を続けてきました。

さて、名古屋市立大学が創立６０周年を迎える平成 22 年は、くしくもシステム自然科学研究科設立 10 周年という記念すべき年でもあります。これを機に正式に名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科同窓会を発足させ本格的な活動をスタートすることとなりました。まだ発足間もなく、会員数も 200 名程度と小規模な同窓会ですが、先にも述べた通り、多岐にわたる研究分野から集まった学生が、様々な専門的知識と技術を修得し、修了生の多くが様々な分野の第一線で活躍している点が他の同窓会とは大きく異なる点であります。

世界的なグローバル化が急速に進み、めまぐるしく社会情勢が変化する今日、新しい科学技術の発展には「特定の狭い専門分野にとらわれない、分野横断型の幅広いマルチな人材」が必要とされています。システム自然科学研究科のバリアフリー型の研究体制の中で育まれた会員全員が力を合わせて、会員及び現役学生との親睦を図ると同時に、その特性を社会活動の中で充分に発揮し、母校の益々の発展と、ひいては名古屋市の発展にわずかでも力を発揮できればと願っています。

同窓会員の集い（学会にて）

# 祝（名古屋市立大学開学 60 年 ひさぎ会創立 60 周年

名古屋女子専門学校・名古屋市立女子短期大学同窓会 ひさぎ会 会長　植村美恵子

名古屋市立女子短期大学は、昭和 22 年に「名古屋女子専門学校」としてスタートしました。昭和 25 年 3 月女専第一回卒業と同時に同窓会が発足し、名称を「ひさぎ会」と定められました。

作者は不明ですが、万葉集第 11 に載っている次の歌からとられたものです。

なみまより　みゆるこじまの　はまひさぎ
波間従　所見小島之　浜久木
ひさしくなりぬ　きみにあわず して
久　成奴　君爾不相四手

久しい間相見ぬ人を恋しく思う心の深さは、私達が在りし母校の友を、懐かしむ気持ちにつながると思います。この気持ちを私共「ひさぎ会」の会員は脈々と守り続けてきたと思います。

「ひさぎ会」の会則に「会員相互の親交を深め、教養を高めることを目的とする。」とあり、これを達成するために年一回の総会の開催、会員名簿の調整、会報（たより）の発行の事業を行っています。これらの事業を遂行するために、会には 10 名の役員（会長、副会長、書記、会計）と 2 名の会計監査をおき、本会の業務のため忙しいなか役員会を行っています。また各学年で選任した幹事で幹事会を組織し、年一回召集して幹事会及び総会案内、会報（たより）の発送を行っています。

平成 9 年に市立大学に統合されてからは、卒業生の入会者はなくなりましたが、総会は毎年盛大に行っています。総会後の懇親会では、音楽または講演会を開催し、有意義な楽しいひとときを過ごしています。

平成 21 年 7 月には「ひさぎ会」創立 60 周年の記念総会を名古屋東急ホテルで開催しました。記念式典後には市立大学学長西野仁雄氏に記念講演をしていただきました。

“脳を使えば心も生き生き元気、イチローの脳を科学する”と題して講演され大好評でありました。

平成 22 年の総会は 7 月 4 日（日）名古屋東急ホテルで開催予定であります。

現在会員名簿の原稿はコンピューターで管理しており、平成 22 年 2 月現在会員数は物故者会員を含め 9,107 名であります。現在は、まだ同窓会活動が出来ると思いますが、やがては、市立大学の同窓会と一緒に活動出来ると良いと思います。

平成 21 年　ひさぎ会総会・懇親会

# 名古屋市立大学開学 60 周年に寄せて

名古屋市立保育短期大学同窓会　さわらび会　会長　渡邊清子

名古屋市立大学開学 60 周年おめでとうございます。開学 60 周年記念誌の発行に当たり、最近 10 年のさわらび会の活動について述べます。

本会は①研究会②合唱部 ( コールさわらび ) ③美術部（さわら美クラブ）を併せ持ち、会員は 6,000 人弱で、会誌「さわらび」を年に 1 回発行し各会員に配布しています。今年で 62 回目となる総会は、概ね毎年 6 月中旬に行います。恩師を招き例年 180 名～ 190 名の出席を得ています。役員は 1 ヶ月 1 回程度役員会を開き会の運営を担っていますが、会の拠点となる「さわらびルーム」がとても役立っています。それと毎年分担している実行委員会が総会・会誌発行・研究会に大きい貢献をしています。特に研究会は、毎年 9 月頃「子どもの心を育てる子育て」という大テーマのもとに、年ごとにテーマを設けて講演会などを行っております。今年度で 12 回目になりますが、名古屋市立大学の先生にお世話になることが多く感謝しています。

「子どもの心を育てる子育て」を講演された奥平先生

総会では前に述べた「さわら美クラブ」の作品が出迎えて参加者をほのぼのとした気分にさせてくれます。午前中は、事業・会計報告並びに当年度の事業計画案・予算案等の後に恩師の記念講演等を行います。平成 20 年 60 回総会には記念事業として、コラムニスト・農学博士の「ジョン・ギャスライト」氏を招き講演を行いました。午後の実行委員が計画する親睦パーティーでは、アトラクション等の他に「コールさわらび」のメンバーがまろやかな歌声で花を添えたり歌唱指導も行い、会場を和やかにしています。このクラブは他のコーラスグループとともに毎年 3 月中旬頃に発表会をしています。

「コールさわらび」発表会

その他の活動としては「白金児童館」の敷地内にある旧学長の記念碑維持活動も行っています。

現在では、同窓会活動ができる状態ですが、将来的にはすべての同窓会が一緒になって大学を盛り立てていくことになりますので、よろしくお願いいたします。

さわら美クラブ作品展

# 開学 60 周年を迎えて

名古屋市立大学　後援会　会長　前田勝昭

名古屋市立大学が開学 60 周年を迎えられるにあたり、一言ごあいさつを申し上げます。

名古屋市立大学後援会は、昭和 31 年 3 月、在学生保護者有志の呼びかけにより、大学の整備拡充、学術研究等の充実のために必要な協力をすることを目的として創立されました。

後援会は、本会の趣旨にご賛同いただける在学生の保護者及び卒業生の他、多くの個人、法人を会員として約 3，000 名で組織されております。様々な援助事業資金を毎年度計上・支出し、学生、大学のために寄与しています。まず、学生に対する援助として、以下のような事業があります。

①学生が自らの文化的素養を高める支援として、名古屋ボストン美術館の学校法人賛助会、徳川美術館の大学メンバーシップへの加入

②学生の課外活動に対する援助として、学生自治会・クラブ活動に対する助成、市大祭等に対する助成、他大学との交流等に対する助成

③国際交流に対する援助として、交換留学に対する旅費の補助、留学生後援会に対する助成

④学生の自主的な学習活動を促すため、資格試験に合格あるいは、基準点数を取得した学生への受験料全額補助

⑤学生の就職あっせんに対する助成

そして、大学の施設や研究教育環境に対する援助としては、

①各キャンパスの学生用駐輪場の屋根の設置への助成

②野外教育の施設利用の補助

③学術研究の援助として、すべての学部・センターへ運営助成

このような多岐にわたる援助支援活動が長年にわたり行えますのも、偏に保護者の皆様、教職員の皆様のご理解、ご協力の賜であります。心より御礼申し上げ、感謝申し上げます。

最後になりましたが、名古屋市立大学のますますのご発展と皆様方のご健康、ご多幸を心からお祈り申し上げまして、あいさつとさせていただきます。

滝子（山の畑）キャンパス四季

# 開学 60 周年を祝して

名古屋市立大学　学友会　会長　前島健利

こんにちは。学友会会長の前島健利です。

名古屋市立大学には学友会という組織があるのをご存じでしょうか？

学友会とは学生によって組織された学生のための組織です。学生より選出された会長、副会長、書記、会計などの役員が中心になって活動し、日々の学生生活をより良いものにするために頑張っています。高校などでいう生徒会のようなものと考えて下さればイメージが湧きやすいと思います。

学友会の目的は「名古屋市立大学学生の友愛と連帯を以て大学の自治を推進し、人類の文化の創造に寄与する」と学友会規約には堅苦しく書かれていますが、実際には自治会や市大祭実行委員会、そしてクラブやサークルなどの学生による課外活動諸団体の代表として大学と協力し、よりよい学生生活を送ることができるよう日々活動しています。

具体的な活動内容として、自治会やクラブ・サークルといった学生団体と大学との窓口となり、各種報告や連絡、活動団体へ大学からの補助金の分配、月に 1 度行われる代表者会議「ＣＡＰ会」の運営などが挙げられます。ＣＡＰ会では各団体の代表者達が集まり、大学からの連絡事項を確認し、学生団体間での連絡を行い、学生会館など学生用課外活動施設使用の調整などを行っています。

また、学友会は学生からの要望を聞き、よりよい学生生活を送ることができるよう大学と話し合いの場を持っています。最近は、学生からの要望の一部が具体化されるようになり、学友会の認知度も高まってきました。

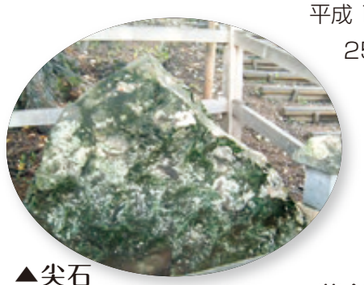
目標に向かって本気で頑張れる部活動、学園生活をより良いものにする自治会、大勢の人が楽しめる学祭を作る大学祭実行委員会、名古屋市立大学には、このような学生団体が数多くあります。一生懸命に活動している団体と学生のため、これからも学友会はいろいろな方々と協力しながら活動していきます。よろしくお願いいたします。

CAP 会

# 思い出の蓼名荘

野外教育施設蓼名荘は、昭和 57 年に長野県茅野市の蓼科高原の静かな別荘地に開設されました。最大約 50 名が宿泊できる施設で、クラブやゼミの合宿などに利用されましたが、平成 19 年 3 月をもって閉鎖されました。

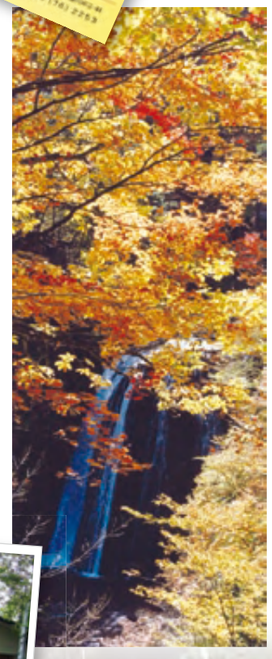
25 年間で本学学生、教職員、卒業生を中心に約 46,000 人の利用がありました。



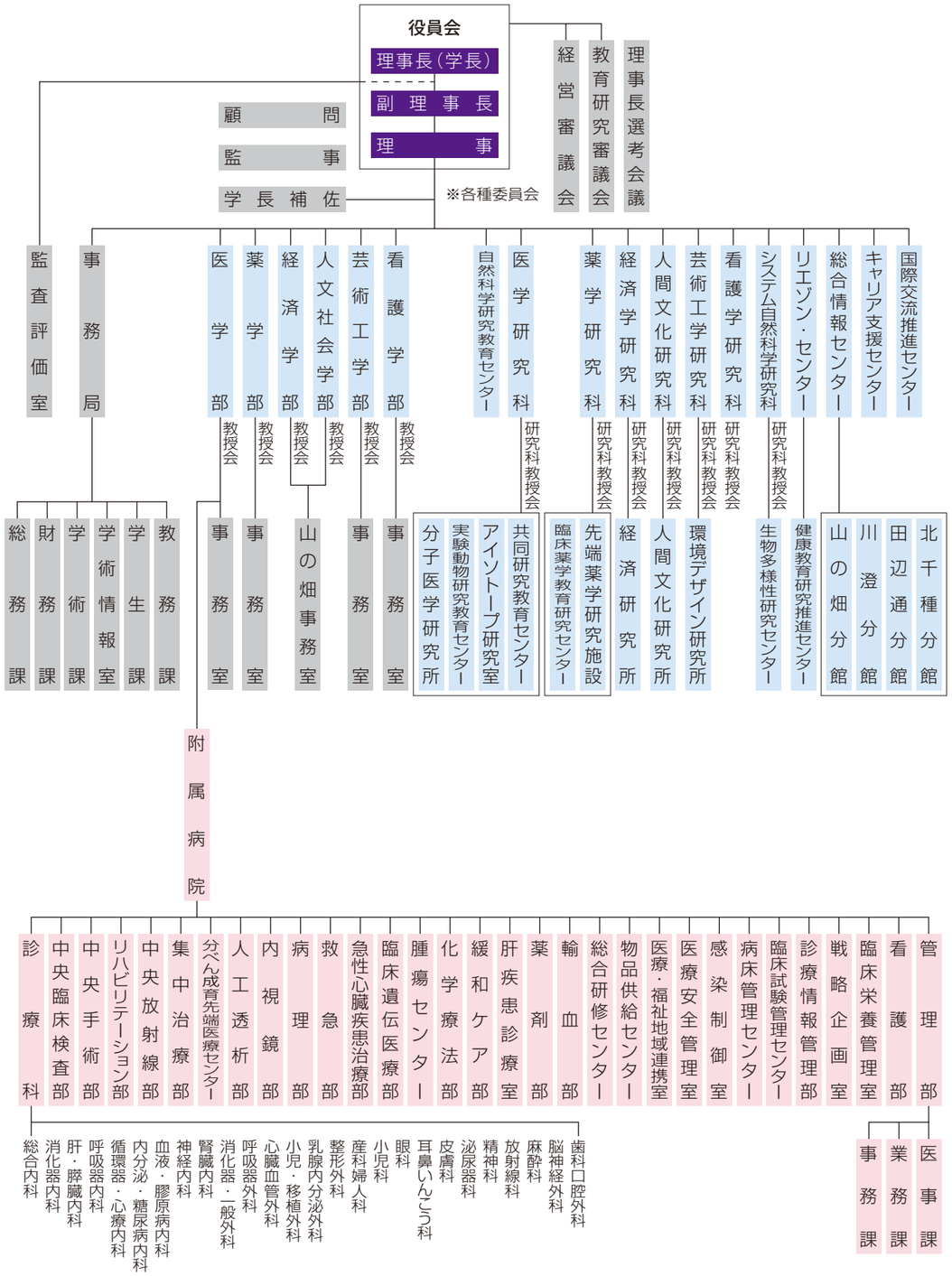
▲尖石

▼蓼科湖

▼蓼名荘



## 組織一覧




## 国内６大学との大学間連携に関する協定の締結

### 国内協定大学

本学は、地域の知の拠点として、教育研究水準のさらなる高度化、個性・特色の明確化を図るため、他大学との連携・協力に積極的に取り組んでいる。

**大阪市立大学・横浜市立大学との連携協定（平成21年3月26日締結）**

大阪市立大学及び横浜市立大学とは、教育・研究活動全般における交流・連携を推進し、相互の教育・研究の一層の進展と地域社会・国際社会及び人類の発展に資することを目的として、「包括連携に関する協定」を締結している。

大都市が設置する公立大学法人であり、医学部ならびに附属病院を有する総合大学であるといった共通点の多い3大学が包括連携協定を締結することにより、大都市制度等に関する共同研究、遠隔授業による単位互換制度、教職員の人材交流、附属病院の運営管理などについて連携・協力を進めている。

**名城大学との連携協定（平成20年2月5日締結）**

名城大学とは、教育・研究活動全般における交流・連携を推進し、相互の教育・研究の一層の進展と地域社会・国際社会の発展に寄与することを目的として、「学術交流に関する包括協定」を締結している。

この包括協定により、医理工連携を始めとする共同研究の推進、連携大学院の実施、地域貢献活動・国際交流事業の共同実施などについて連携・協力を進めている。

**静岡県立大学・岐阜薬科大学との連携協定（平成20年1月22日締結）**

静岡県立大学及び岐阜薬科大学とは、薬学分野における地域の教育研究拠点の形成を推進することを目的として、「連携・協力に関する基本協定」を締結している。

地域的にも近接する公立3大学が基本協定を締結することにより、基礎・応用・臨床研究の推進、薬剤師・研究者の育成、生涯教育の推進などについて連携・協力を進めている。

・文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム（平成20年度採択）：「三公立連携薬剤師生涯学習支援講座」の実施

**名古屋工業大学との連携協定（平成19年12月5日締結）**

名古屋工業大学とは、研究・教育・国際交流・産学連携など、大学におけるあらゆる分野において連携・協力を推進し、わが国及び世界の学術の発展と有為な人材の育成に寄与することを目的として、「連携・協力の推進に関する基本協定」を締結している。

平成13年3月に「単位互換に関する協定」を締結しており、教育の充実及び相互交流に努めてきたが、この基本協定の締結により、共同研究の推進、施設等の相互利用、国際交流事業・産学連携事業の共同実施などについて連携・協力を進めている。

・文部科学省大学院教育改革支援プログラム（平成20年度採択）：「薬工融合型ナノメディシン創薬研究者の育成」プログラムの実施

# 海外の交流協定締結大学（平成 22 年 9 月 1 日現在）

大学間交流
学部間等交流

11 中央民族大学

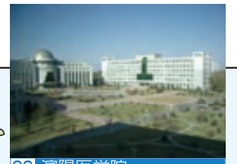
14 ハルリム大学

12 瀋陽薬科大学

04 ウィチタ州立大学

10 浙江大学管理学院

08 南京医科大学


09 瀋陽医学院

13 中国社会科学院
日本研究所

06 バックネル大学

23 ベトナム国立大学ホーチミン校

20 ハレ・ヴィッテンベルク－
マルティン・ルター大学

21 ルートヴィクスハーフェン経済大学
東アジアセンター日本学科

19 ライプツィヒ応用科学大学

16 コロンボ大学

22 マレーシア国民大学

05 ノースカロライナ大学
グリーンズボロ校

24 クイーンズ大学
国際学習センター

17 パリ第 13 大学

01 ニューサウスウェールズ大学

03 南カリフォルニア大学

18 サンティエティエンヌ大学
アート・デザイン学校

07 トリノ工科大学

15 ペーチ大学

02 シドニー大学

**オーストラリア**

01 ニューサウスウェールズ大学
- 全　学：学術交流覚書（平成 19 年 1 月）
- 医学部：学術交流協定（平成 8 年 12 月）

02 シドニー大学
- 看護学部／薬学部／医学部：学術交流協定（平成 14 年 3 月）

**アメリカ**

03 南カリフォルニア大学
- 薬学部：学術交流協定（平成 4 年 9 月）

04 ウィチタ州立大学
- システム自然科学研究科：学術交流協定（平成 14 年 12 月）
  ：学生交流協定（平成 14 年 12 月）
- 芸術工学部：学生交流協定（平成 17 年 9 月）

05 ノースカロライナ大学グリーンズボロ校
- 経済学部：学生派遣に関する協定（平成 20 年 9 月）

06 バックネル大学
- 人文社会学部：学生派遣に関する覚書（平成 16 年 11 月）

**イタリア**

07 トリノ工科大学
- 芸術工学部：一般協定（平成 13 年 1 月）

**中国**

08 南京医科大学
- 医学研究科／薬学研究科：学術交流協定（平成 14 年 11 月）

09 瀋陽医学院
- 全　学：学術交流協定（平成 20 年 12 月）

10 浙江大学管理学院
- 全　学：学術交流協定（平成 21 年 5 月）

11 中央民族大学
- 全　学：学術交流協定（平成 22 年 5 月）

12 瀋陽薬科大学
- 全　学：学術交流協定（平成 22 年 8 月）

13 中国社会科学院日本研究所
- 経済学部：国際学術交流協定（平成 9 年 10 月）

**韓国**

14 ハルリム大学
- 全　学：学術交流に関する覚書（平成 18 年 11 月）

**ハンガリー**

15 ペーチ大学
- 全　学：学術交流協定（平成 19 年 1 月）

**スリランカ**

16 コロンボ大学
- 全　学：学術交流協定（平成 19 年 1 月）

**フランス**

17 パリ第 13 大学
- 全　学：学術交流協定（平成 19 年 5 月）

18 サンティエティエンヌ大学アート・デザイン学校
- 全　学：学術交流協定（平成 22 年 6 月）

**ドイツ**

19 ライプツィヒ応用科学大学
- 全　学：学術交流協定（平成 21 年 3 月）

20 ハレ・ヴィッテンベルクーマルティン・ルター大学
- 人文社会学部：学生受け入れに関する協定（平成 7 年 2 月）

21 ルートヴィクスハーフェン経済大学東アジアセンター日本学科
- 経済学部：学生受け入れに関する協定（平成 6 年 4 月）

**マレーシア**

22 マレーシア国民大学
- 全　学：学術交流協定（平成 22 年 3 月）

**ベトナム**

23 ベトナム国立大学ホーチミン校
- 全　学：学術交流協定（平成 22 年 3 月）

**イギリス**

24 クイーンズ大学国際学習センター
- 人文社会学部：学生派遣に関する協定（平成 19 年 5 月）
- 経済学部：学生派遣に関する協定（平成 20 年 9 月）

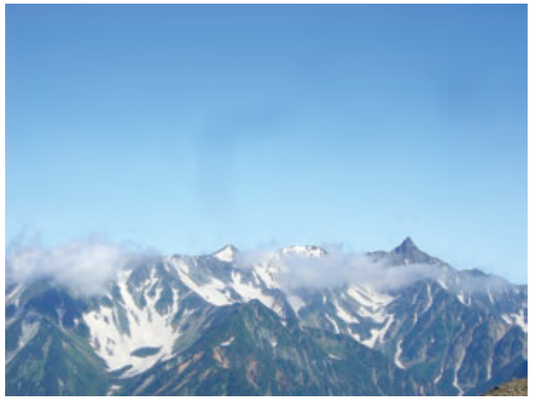
# ［　あとがき　］

名古屋市立大学設立 60 年を記念する記念誌の編纂が計画され、ここにようやくその上梓までこぎつけるに至りました。ここに至るまでに、学内外の数多くの方々に協力を頂き、多くの原稿と貴重な写真を集めることができました。厚くお礼申し上げます。

この 10 年の動きを中心に編纂をしましたが、この間、名古屋市立大学を取り巻く環境は大きく変化しました。そのような中で、名古屋市立大学は、公立大学法人化、新病院や薬学部新研究棟の建設など、新しい時代に適応するために着実に姿を変え歩んできました。

この 10 年間の変化がこれからの 60 年に向けての礎となるものだと信じ、また、この変化を記録したこの記念誌が、名古屋市立大学の今後のさらなる飛躍の糧となれば幸いです。

編纂委員長　　神山　眞一



# ［　記念誌編纂委員会　］

【 委 員 長 】

| | | |
|---|---|---|
| 平成 21 年度 | 理事（教育担当） | 向井　清史 |
| 平成 22 年度 | 理事（教育・情報担当） | 神山　眞一 |

【　委　員　】

| | |
|---|---|
| 医学研究科　教授 | 稲垣　　宏 |
| 薬学研究科　教授 | 今泉　祐治 |
| 経済学研究科　教授 | 河合　篤男 |
| 人間文化研究科　教授 | 山田　　敦 |
| 芸術工学研究科　教授 | 嶋田　勝彦 |
| 看護学部　講師 | 山口　孝子 |
| システム自然科学研究科　教授 | 竹島　伸生 |
| 総合情報センター副センター長 | 三澤　哲也 |
| 医学部附属病院病院長 | 山田　和雄 |
| 事務局学術課長 | 入江　芳樹 |
| 事務局学生課長 | 加藤　達也 |

事務局　学生課　学生支援係　柴田雄介・上野徹
表紙写真提供　経済学研究科准教授　茨木智
カラーグラビア（平成 22 年 7 月 20 日撮影）　株式会社エスエス名古屋
表紙写真（滝子キャンパス樹木）提供　経済学研究科准教授　茨木智
表紙写真（雲海）、差し込み頁、及び p 71 写真提供　蝶ヶ岳ボランティア診療班
目次写真（平成 22 年 6 月 19 日撮影）　ながさか

名古屋市立大学 60 年の歩み

発　　行　2010 年 10 月 28 日

発 行 者　名古屋市立大学記念誌編纂委員会

編　　集　記念誌編纂委員会

印 刷 所　株式会社 ぎょうせい 東海支社
〒 460-0003
愛知県名古屋市中区錦 3-10-33
TEL. 052-231-0331

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

この冊子は再生紙を使用しています